

# 前線日記

へか帝

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

退役軍人「現役時代使つてた銃が女の子になつたつてマジ?」

目

次

一冊目  
二冊目  
三冊目  
四冊目  
五冊目  
六冊目  
七冊目  
八冊目  
九冊目  
十冊目  
十一冊目  
十二冊目

78 72 64 57 48 35 28 23 18 12 6 1

十三冊目  
十四冊目  
十五冊目  
十六冊目  
閑話  
十七冊目  
十九冊目

110 106 100 96 91 86 82



# 一冊目

○月○日

今日でクルーガーのクソ野郎ともおさらばだぜ。シーユー筋肉ゴリラ。あんな職場二度と戻るか。悪いなカリーナ、俺は先に抜ける。

この清々しい気持ちを記録するため、今日から日記をつづることにする。  
これで俺は完全に根無し草となつたわけだが、まあなんとかなるだろ。

○月×日

丸一日彷徨つた結果無人となつた工場を発見した。持ち逃げした四丁の銃器は人形との戦闘で使い物にならなくなつてしまつた。これ以上の戦闘できないところまできていたのでギリギリセーフってところだな。でも風穴とか空いちやつてどうすんのよコレ。

肝心の工場だが、当然ながら廃墟ではあるものの崩壊の規模も小さい。そして機材は意外なことに状態が良かつた。それなりの期間放置されたせいかななか酷い有り様だが、致命的な欠損はなさそうだつた。電源さえどうにかなれば動くんじやないだろうか。

どういういきさつでここが廃棄されたかはわからんが、この町工場はあの紫色のぶつ壊れた人形どもも近寄つてこないしい拠点が手に入つてよかつた。雨も凌げるし、暇つぶしの道具にも困らなさそうだ。

## ○月□日

倉庫に大量の保存水と乾パン等の非常食を見つけた。俺一人なら当分は困らないだろう。おあつらえ向きに予備バッテリーも少量ながら発見できた。更に工場内を漁つてみたところ、素晴らしいものを見ついた。

コンデンサだ。これさえあれば電力が蓄えられる。使い捨てのバッテリーくらいは作れるだろう。予備バッテリーが全滅する前にはどうにかしないとな。

それとこの工場だが、どうやら銃の工場だつたらしい。前時代的な古めかしい設計図が、なんと紙媒体で残されていた。よくもまあこんなご時勢に紙文書を採用したものだ。この日記も同様に、端末なしに自由に閲覧・記入できるのは電子データよりも優れただ。こうして何もかもが機能停止しても紙は紙のままだからな、お陰様でしつかり閲覧できる。埃まみれだつたり黄ばんでいるのはこの際我慢しよう。そこまで贅沢は言えん。

しかしこの工場は異様にマニュアルが多い。そちらじゅうに張り出されているのを

確認できた。普通はもつと標語とか注意喚起が多くを占めているものだろう。恐らくだが、ここは工場が稼働し始めてから日も浅いまま廃棄されてしまったのではないか。だとすれば機材の状態が良かつたのも頷ける。機材表面の油膜がなく、ダメージは錆びによる経年劣化がほとんどで摩耗や破損が少ないわけだ。

### ○月△日

結論から言うと、銃ができた。無事バッテリーは役目を果たし、機械は動いた。マニュアルに沿つて図面を読み込ませ基本的な入力さえすれば、機械がテンプレート化された手順に沿つて動く。全ての工程が一つの機械に結集されているのには驚いたが、数世紀前の骨董品を現在の科学力で量産しようとすればこうもなるのか。

面白がつて俺の愛銃と同じもの製造してみたが、いつのまにか使用した図面が跡形もなく消滅していた。まさか設計図が消耗品などと誰が予想できようか。

製造した銃の名は順にUMP45、UMP9、HK416、G11というらしい。そんな名前だったのか、散々酷使しておきながら知らなかつたぜ。ちなみに名前は設計図に書いてあつた。多分明日には忘れてる。

軍人の癖に銃に疎いのをどうにかしろとクソゴリラによく説教されたもんだが、引き金引いて鉛玉でるんならどれも一緒だろガハハハ！

と、そう言つた直後にぶん殴られたのは記憶に新しい。

○月○日

この工場のもう半分を見つけた。人形工場だ。もつともこちら側の工場よりも損壊が酷く、ほとんどが倒壊していた。瓦礫だらけで住居としても使えそうにない様子だつたぞ。それも自然倒壊ではなく、何者かが明確な意思を持つて破壊した様子だつたやつは紫色の人形作つてた工場だからだろうか。

それと昨日できた銃だが、改めて見ると酷い出来だつた。機械はともかく、材料が良くなかった。元から機械に突つ込みっぱなしの材料じやあまあそなうなるわな。動かんこともないんだが、要所が歪んだり曲がつたりでちよつとよろしくない。仕方がないので俺の持ち逃げした方の生きているパーツを交換してやつてなんとかした。とりあえずこれで弾がまつすぐ飛ぶようにはなつた。ますます不格好になつてしまつたが、弾が出るならそれで人形が襲つてきても対処できるだろう。

Φ月Φ日

前回の日記から随分日が空いた。途端にこれほど立て込むとは思つていなかつたぞ。あの後、どこぞの人形が転がり込んできた。問答無用で銃口を向けてくるファツキン紫ではなく、我らがグリフィンの人形だ。中々に損傷が激しかつたので有り合わせの材料で応急修理をしてやつた。昔取つた杵柄つてやつでな、I・O・P製の人形なら多少

は整備の心得がある。まあ人形といえど同じ戦場を駆けた戦友だからな、情も湧くつて  
もんよ。当時直してやるための修復技能を修めたのは間違いじやなかつたつてことだ  
な。そんなこんなで話を聞いてみると、なんと俺を連れ戻しに来たという。だが幸いな  
ことに背後にいるのはクルーガーやヘリアンではなく、ペルシカだった。

奴は俺の所在をクルーガーにチクらない代わりに、俺の銃を寄越せと主張してきた。  
たぶん人形と物質を結び付けてうんたらかんたら実験に使うんだろう。  
仕方がないので定期的に水と食料、バツテリーやを寄越すことを条件に加えて了承して  
やつた。

◎月●日

俺の銃を持った人形が工場に住み着いた。どうしよう。

## 二冊目

◎月●日

しんどいです。

やつてきた人形が俺に懐きすぎて非常に疲れる。とりあえず一日一人ずつ名前を覚えることを目標とする。

まず出会い頭に全身で抱きつきダイブしてきたヤツな、UMP9。栗色の髪をしたツインテール。一番最初に名前覚えたわ。そのまま押し倒されて後ろの弾薬箱ぶちまけてそらもう大惨事よ。でもすぐに謝つてたから不問とする。

とりあえず話を聞いてみると、やつらは指揮官がいなくともある程度の活動ができる特殊な自立人形だそうだ。銃器と人形をリンク？させるナントカ技術を高度に成立させる為には通常の銃器ではダメということで俺が酷使していた銃に白羽の矢が立った。極秘作戦での運用を前提しているらしく、諸々が通常の規格を逸脱した性能であるそうだ。え、それって違法なのでは――？

俺は何にも気づかなかつた。いいね。

で、先日引き渡した銃がこうして戦術人形になつて帰つたきたつてことらしい。帰つ

てきたつていうと語弊があるな。まだ戦闘のせの字も知らんヒヨツ子戦術人形が俺の所に師事しにきたんだつてよ。いや君ら戦術人形でしょ？手に負えないんですけど。

### ◎月□日

寝て起きたらUMP9が俺の上で寝ておつた。上つてお前。そりや寝苦しいわけだよ。あれだな、甘えたがりの猫だ。でも寝ぼけてサブミツション極めてくるのは本当やめろ。骨のきしむ音で目が覚めるなんて本当に勘弁だからな。

今日は覚えたのはUMP45。UMP9の姉らしい。外見も結構似ていて茶鼠色の髪を横に纏めた髪型をしている。なんとこの人形たちの小隊長を務めているそうだ。正直苦手。まず距離が近い。廃品とか漁つてると隣で物言わざじつと見てるんだよな。廃品じゃなくて俺の方を。あといつも影の差した表情で微笑んでるのが怖い。何考えてるのか全然わかんない。ずーっと俺のあとをついてくるし。

でも人手が足りなくて困っているときには率先して手伝ってくれる気立てのいいやつ。

ただ隙を見て俺がふらつと離れた場所に足を運ぼうとすると「指揮官、どこにいくの？」つて言つたり既に先回りしてて「待つてたよ、指揮官」とか言うのやめてほしい。呼び止めるのはまだしも先回りしているのはどういうことなんだ。

あのしきかあーんっていう間延びした呼び声がトラウマになりそうだよ俺は。

◎月三日

とりあえず戦術人形が何故俺なんぞの所に学びにきたのか聞いてみた。

彼女らは404小隊という特殊な作戦を行わせるための戦術人形であり、高い戦闘能  
力を必要とする存在であるそうだ。無論もとから高いカタログスペックはあるものの、  
ぶつつけ本番で極秘作戦に投入するのは躊躇われるということで、彼女たちの強い希望  
により銃の元の持ち主である俺のところに教えを請いに来たとかそういう流れらしい。  
正直当面は俺一人の生活だけで手いっぱいなのでもう少し待つてもらうことになつた。  
クライアントがどこの誰かは知らんがいい迷惑だぞまつたく。ペルシカはあくまで製  
造元つてだけだしなあ、つついても特に情報は期待できないだろう。

今日はHK416。まだ覚えていないのがばれてちゃんと覚えてくださいね（威  
圧）って言われた。笑顔が怖い。

完璧主義で俺が適当に放つておいた諸々を整頓してくれたので大変ありがたい。で  
も使つたら元の場所に戻さないとぶんすか怒るのでちょっと肩身が狭い。なんかもの  
すごく俺の世話を焼きたがっているが、俺は自分のことは自分でできる人なのでやんわ  
りお断りしている。

## ◎月△日

朝からUMP9に殺されるかと思つた。あいつサブミツションが日に日に上達してやがる。違法パーツのポテンシャルを全力で發揮し尋常ならざる力で締めてくるから全然抜け出せなかつた。マジで早めになんとかしないと俺の命が危ない。

今日覚えたのはG11。ひとことで言うと癒し。この俺を遙かに越えるレベルで無気力な奴だ。基本的にずっと寝てる。俺の寝床をずっと占拠してるのは困りものだが特に何もやらかさない。毎朝寝ぼけて俺を絞め殺そうとしてきたり何時いかなる時も俺の側にいたりしないので本当に癒し。

ほつとくと永遠に寝てるが、一応UMP45の言うことだけは聞く。HK416の言うことは聞かない。なのでよく担ぎ出されている。なんだかんだで仲は良いようだ。

俺の言うことは聞いたり聞かなかつたりする。まあそんなもんだな。

## ◎月△日

今日はついに教育（仮）に踏み切つた。余裕のあつた工場内の食糧と水の備蓄なんだが、急に同居人が4人も増えたため事情が変わつたのだ。

破壊された人形工場からもうひとブロック向こうに行けばちよろちよろと鉄血人形

がいるので、強襲して物資を頂こうという算段だ。もちろん俺も同行した。武器もないのに一体何をするというのかという話だが、404小隊も指揮官が無くても活動できるとは言つても、いるに越したことはないらしい。

とりあえず今日は3小隊ほどにちよつかいをかけて物資をちよろまかしてきたが、こいつらやっぱ強いわ。俺はちょい離れたところから無線で適時指示を飛ばしていたんだが、終始危なげなく終わつた。陣形の組み方と変形のパターン仕込んだらあつという間に理解してモノにしていたしやっぱ素材が違うと出来が違うのかね。もう既に俺が教えることなんてないと思うんですけど。

### ◎月8日

とうとう朝のデスマッチにUMP45が参加した。一体いつの間に転がり込んだのがUMP姉妹にサンドイッチされてしまつた。字面からはとても幸せそうで夢のあるものを想像するかもしれないが、あれは生命を脅かすとても危険なものだ。

いうなれば万力。上からも下からも凄まじい圧力で抱きしめられ、俺は危うく爆発四散するところだった。いや比喩ではなく。久々にマジで死を覚悟したぞ。結局G11のおかげで九死に一生を得た。ほんと愛してる。

昼過ぎに昨日の戦闘について簡単に反省会を行つた。といつても特にそれらしい指

導はできなかつたが。

G 1 1 はいざ 戰闘となれば普段の無気力が嘘のように活躍する。オンオフの切り替えはしつかりしているようだ。いつもそうちだつたらいいのにと H K 4 1 6 がよくボヤいたのが印象的だつたな。

あとは銃器のメンテナンスもしてやつた。体の一部のように一体化しているお前らの方が勝手が聞くんじやないかとも思ったのだが、しつこくせがまれたので根負けして結局やつてやることになつた。

肝心の人形の方は別に修復するアテがあるそうだ。とはいへ、人格のバックアップもとつていないうだし、慎重を期するに越したことはないだろう。人形は消耗品ではないのだ。

ところで今朝確信したんだが、U M P 4 5 よりも妹のU M P 9 の方が胸が大き  
(日記はここで途切れている)

# 三冊目

◎月△日

いやあ、昨日はひやりとした。この日記は日が暮れたあと人形の皆が工場の戸締りやら設置した罠のチェックなどをしているうちに隅の小屋でさくつと書いているのだが、昨日は途中でUMP45が訪問してきた。なんとなくで唯一の出入口である扉を施錠しているのだが、それがいけなかつた。

はじめはノックしながらいつものようにしきかあーんと呼び掛けてきていたのだが、「ええ、あれ？」そういえばどうして俺があの小屋にいると知っていたのだろう。おかしくないか？　いや考えても分からん。

とにかくUMP45が呼び掛けてきていたのだが、丁度その時UMP45に関する内容を日記に書いている最中で、しかもそれがUMP45に負い目のある内容だったので俺は適当に煮え切らない返事をしてしまつたんだな。それを不審に思つたUMP45が扉を開けようとして鍵が掛かつていることに気づき、「指揮官わたしに隠れて何してるのー？」と言いながらドアノブをガチャガチャさせてきたのだ。その時のシチュエーションがなんか死ぬほど怖かった。あまりの怖さに昨日そういう悪夢にうなされたか

らな。

最終的にはUMP45はドアノブを握った状態のままゴリっと扉を破壊して侵入してきたぞ。ある程度腐食して脆い木造の扉だったとはいえ、絵面が凶悪すぎてもうダメ。

とりあえず正直に一日の記録を残していたと白状した。やつていることはとくにやましいことではないからな。いや、やましいことを書きかけてはいたけれど。

結局この日記をみせなくてはならなくなつてしまつたが、大丈夫。こんなこともありますかとこの日記は母国語で書いてあるのだ。こちとら亡国ジャパニーズやぞ、とうの昔に失われた言語じや読めるものなら読んでみいH A H A H A !

ただひとつ気がかりなのはUMP45が俺の日記を網膜と記憶中枢に焼き付けるようには隅々まで目を通していたことかな。ひよつとして読めないなりに内容を全部暗記してたりして。

いや流石にないな。まさか視界を映像として保存する機能でもあつていつの日か解読を試みようとしている訳もあるまいし。

### ◎月一 日

ちよつと昨日の日記読み返したらUMP45のことしか書いてないじゃねーか。こ

れはいかん。どうせ書くならG11にするべきだ。

まあそれはさておき、今日も鉄血のところへ襲撃だ。今回は現役ながら俺が小隊長として人形を率いての戦闘だった。うーん懐かしい。あの頃とはだいぶ勝手が違うが、404小隊は有能なので特に指示系統にトラブルなし。最高かー？

銃は昨日作ったUMP40を持って行つた。これは昨日の日記に書き忘れていた部分だな。昨夜の日記を書いているときはもうUMP45のことでの頭がいつぱいだつたから……。設計図はUMP40で最後だつた。もつとあるかと思つたんだが、破れたり何かの染みが広がつてしたりで使い物にならなかつた。コレ紙媒体の悪いところ。

もちろんこの銃もご多分に漏れず酷い出来栄えだつた。まあ同じ機械で作つたんだから当然だな。流石にスペアパーツの持ち合わせは無いのでこれを持つて行つた。正直ないよりマシってレベル。そもそも銃弾が真つすぐ飛ばないし。まあ銃口が正面向いてないのに弾が前に飛ぶわけがないよね。

ちよつといい所見せようとして部隊の最前線を買って出た俺つてほんとバカ。

Φ月α日

UMPサンドで俺が潰れる（物理）未来が現実的になつてきたので、ついに今日G1以外の者が俺の寝床に近づくことを禁止した。

これに一番反応したのはUMP9。もしやもしや食つてた配給（チョコ味の一番おいしくやつ。物欲しそうに見てたからちよつと多めに分けてやつた）をぼろつと落としてこの世の終わりみたいな顔してた。ちょっと罪悪感。

ちなみにHK416の要望によりG11を連れ出すときに限り例外的に許可することとなつた。良かつたなG11、お前には外に連れ出してくれる素敵な仲間がいるぞ。G11から裏切り者って言われた。一体いつから俺がお前の安眠を支援すると錯覚していた？

あと昨日もつてつたUMP40な。マジでこのポンコツどうしようかと思つたが、俺が持ち逃げした銃が全て新たな持ち主のもとに渡つてしまつた以上、このUMP40が最後のよすがとなる。もしなにかあつてこの工場を離れなければいけなくなつた時のためにこの銃は大切にすると決めた。

というわけで、どうにかしてもうちよいマシにできないものかと今日は一日UMP40を叩いたり削つたり伸ばしたりしてた。

そして誕生したのがどこに弾が飛ぶのか俺すら予想できないデンジャラスウェポン。ナックルボールかよ。

「え？ 一人じや怖くて夜ぐつすり眠れないって!? 仕方ないなあG 1-1は！ 私が一緒に寝てあげよう！」昨日の晩にやつてきたUMP 9の第一声がこれである。せめてG 1-1の方向いて言うくらいしろよ。そしてそのまま俺の寝床に来るな、吐いた言葉通りG 1-1の方へ行け。何が指揮官の側で眠らないと死んじやう病だばかたれ。俺の布団（ダンボールと梱包紙に緩衝材を組み合わせた最高級のロイヤル寝具）からしがみ付いたまま離れず、無理に引きはがすとロイヤル寝具が破損する恐れがあつたので結局一緒に寝ることになった。

なお恐怖の目覚ましサブミッションは俺がG 1-1を抱えて寝ることで回避。G 1-1からは指揮官の為にもやめたほうがいいと思うと進言があつたが、強行施策した。完璧な作戦だとそのときは思つてたから。

なお実際は9にむき出しの頭部をふともも締めされて窒息死間際までいつた模様。確実に殺意が込められている。なんか悪いことしたかな。

命からがら朝を迎えたあと、9を追い出して一日寝床からほとんど出ずに空き缶をやぶつたものを研いで簡易ナイフを作る内職をした。たまには部屋でひつそりと一人の時間を過ごしたかったのだ。G 1-1はあれだ、人数にはカウントしない。分類はインテリア。だがG 1-1を連れ出すことを口実に何度もUMP姉妹が突撃してきた。お前ら普段は好きなだけ寝させてあげてるだろうが。そして珍しく自主的に起きてきたG 1

1を寝室に押し込んでまた部屋に来る口実を作るのやめてあげろ可愛そだと思わんのか。

Φ月・日

「え?お姉ちゃんがいないと怖くてぐっすり眠れないって!? 仕方ないなあ♀は!  
私が一緒に寝てあげよう!」

Φ月※日

H K 4 1 6が全員ひきずり出していった。惚れそう。

# 四冊目

土月●日

UMP姉妹対策にG11を用いての護身を考えるも、指揮官を死なせないためにも協力できないと言いG11はこれを断固拒否。まるで俺がG11を抱いて寝ることがUMPコンプレッサーの出力を上げるかのような物言いだつた。それとこれに一体何の関係があるのか、俺にはさっぱりだつたが仕方がないので昨夜はそのままUMPコンプレッサーに無抵抗で飲み込まれた。限界は近い。おそらく来週には俺の全肋骨が粉碎されることだろう。

さて連日行っている物資補給を兼ねた戦闘訓練だが、これはもうほとんど意味が無い。物資が潤つて助かるはあるが、手慣れすぎてもはや作業だ。周辺の鉄血人形ではもう相手にならんらしい。戦闘に慣れるという意味では悪くないのかもしれないが、優先度は低い。だが、だからといって生死をかけて修羅場をくぐらせるような訓練はできない。そんな環境もないし、そういうのは実戦で培つてこそだ。とりあえず今日は工場内をパルクールしながら縦横無尽に駆け回つた。運動神経というか、体の使い方も覚えてもらいたい。特に室内戦での移動能力は重要だ。

やはりというべきか、イメージ通りUMP9は抜群の運動神経を発揮してぴったりと俺の背後についてきていた。流石だな。ぶつちやけ凄いことなので『こ褒美に頭をなでてやつた。うーん丁度いい高さ。UMP45も案の定そつなくこなしていた。何やら『私には『こ褒美ないの?』的な視線を背中に注がれたような気がしないでもないが、努めて無視した。

HK416はちよいと難アリだな。一度足を滑らせて落ちてた。幸い大きな怪我はなかつたのだが、結構派手に服が破れてしまい大きなわわが露わになつてしまつた。でかい。

白状すると一瞬いや嘘は良くないながつづり視線を奪われたのだが、背後のUMP姉妹がいる方向からセーフティを外しコツキングレバーを引く音が聞こえたことに危機感を覚え即座に視線を切つた。引き金に指をかけていたの見たからな俺は、薬室に実包が入る音がやけに耳に残つた。

流石に一旦中止し、有り合わせの布(またの名を俺の服という)で修繕してやつた。最後にG11。問題児である。へばるのがあまりにも早い。運動能力は意外に悪くないんだがなあ。他より銃が重いのもあるかもしれないがあれはまずいだろう。

毎朝俺が死にかけているのはそもそも『寝床への侵入はG11を連れ出す場合は例外的に許可する』というルールが悪用されているのが元凶なのかもしない。

ここは断腸の思いでG11と別室で眠るしかないのか。だがこの娯楽のない廃工場生活においてG11からもたらされるアロマセラピー効果は決して軽視できるものではない。どうにかG11と共に快適な夜を過ごしつつもUMP姉妹から逃れる術はないものか。ルールの破棄も少し考えてみたが、快適な生活に多大な貢献をしてくれているHK416たっての望みを無碍にするのも忍びない。何かいい落としどころはないものか。

それはさておき、404小隊の研修も新しいステップに進むことにした。ハツキリいつてこいつらの戦闘力は既に申し分ないレベルまで達しているので、もつと別の方面を伸ばしてやる方がいいと思つたのだ。

行つたのはかくれんぼ兼鬼ごっこである。とどのつまり昨日のパルクールの延長だな。

たかがごっこ遊びと侮るなかれ、こいつらがどんな任務に従事するかは知らんが隠密能力と追跡能力はどんな状況でも応用が利く。どうやら404小隊が配属されるのは尋常な任務ではないようなので、まあ役に立つだろう。差し当たり今日はこの工場を使ってのかくれんぼだ。今日は俺が鬼。ルールはシン

ブルに鬼に確保されたら負け。無論俺のロイヤル寝具で惰眠をむさぼっていたG11も心まで鬼にして布団から追い立て参加させた。

工場もまあまあ広いんだが、昼前には全員捕獲できてしまった。戦闘のエキスパートといえど、こういう面ではまだヒヨつこらしい。これは教えがいがありそうだ。ちなみに今日時点で一番粘つたのはHK416だつた。昨日の失態にも思うところがあつたんだろう。痕跡を残さずに行動するのが上手かつた。

それを昼過ぎまで繰り返した後は、反省会を開いたり逃走のいろはについて講義した。まあこいつらならすぐに覚えるだろう。

土月日

朝、UMP9とUMP45に挟まれながら臓物が圧し潰される痛みと戦つていたら妙案を思いついたぞ。そもそも全員の寝床を同じ部屋にしておけば済む話じやないか。G11と同室で寝ができるしUMP姉妹も自分の布団があれば俺のところへ侵入してくることもないだろう。明日から解放されると思うと心が救われる。無論体の方もな。今まで朝が近づくにつれて抱き着く力が強くなつていくので外が明るくなるにつれ絶望してたからな。

さて、今日は鬼を交代だ。404小隊全員から俺一人で逃げた。範囲は昨日同様に工

場内に限り逃走。

昨日の惨敗を反省したのか、部隊で連携を取つてやる気マンマンだつたぞ。視野の広いG11が高所に陣取り索敵を担当し、HK416がルートを組み立てつつ先回りすることで逃走ルートを限定し機動力のあるUMP姉妹が追う。

各自の得意を活かした素晴らしい連携だった。何度もヒヤリとする場面もあつたし、大したものだ。

でも言いたいことはたくさんある。まずUMP45は俺が物陰でやり過ごそうとしている俺を探すとき「指揮官のにおいがする……ふふ」つていいながら着実にこつちにくるのやめろ。俺の居場所を確信したとき「あは。指揮官、今そつちにいくね……？」つていうのはもつとやめろ。恐怖でしかないわ。クローゼットに隠れる女子供に迫る殺人鬼かよ。

そしてUMP9。逃走する俺を追いかけながら「本当の家族になろう！」つてどういう意味だ。あまりにも理解が及ばない。意味不明な理論を並べながら殺害を繰り返すサイコキラーみたいだからやめてほしい。あとなんで俺を袋小路まで追い詰めたときよだれ垂らしてた？ 思わず冷や汗がでたわ。あれは完全に捕食者の目だつた。

この訓練はあまりやらないほうがいいな。具体的には奴らが俺を捕まえられるくらい上達する前にやめよう。うん、その方がいい。

# 五冊目

Ψ月3日

全員で同じ部屋で寝ようという提案を話してみると、非常にすんなりと受け入れられた。相談してすぐに「じゃあベッド移そつか」とそのまま家具の運び出しを始めたので流石に面食らった。なんだその行動力。

次々とソファや大柄な座椅子、ハンモックなどが運び込まれあつという間に広々としていた俺の寝室が手狭になってしまった。

というか君たちそんな贅沢な環境で今まで寝てたんだね。俺が紙やダンボールで作つた粗末な布団を最高級呼ばわりしてのはなんだつたんだよチクショウ。恨むぞ、おい。

でもどうしてソファのような充実した就寝環境を捨ててまで毎晩俺の所に来るんだろうか。あれかな、衝撃緩衝材のぶちぶちが出荷前を思い出してノスタルジーな気分に浸れるとかかもしれない。実家の布団だといつもより安眠できる的な。今や俺の実家は放射能に埋もれた焦土だけどな！ ギブミー帰る家。

でも常連のUMP45は「こっちの布団で寝よー？」などと手招きしてきたからやつ

ぱり違うかもしない。ちなみにその誘いは蹴った。だつて編みこまれたハンモックが獲物を待ち受ける蜘蛛の巣に見えたんだもん。絶対に一度絡まつたらもがけばもなくほど深みにハマる類のアレ。

あと許せないことになんとG11が寝袋を持ちだした。本当に許さない。あまりに許せなかつたので復讐としてG11の入つた寝袋に俺も入つて寝ることにした。どう見ても二人も入れる設計ではなかつたが強引に押し入つた。凄まじく窮屈だつたがG11のぬくもりでとても安らかに眠ることができたし、何より寝袋のおかげでUMPサンドを恐れずに済んだというのも大きい。G11の抗議の声は聞こえないふりをした。

訓練は昨日と同じ鬼ごっこだ。鬼は俺と404小隊で日替わりにしようと思つていたのだが、今日はUMP姉妹の強い希望で連日俺が逃げる側となつた。有無を言わさぬ勢いだつたので思わず頷いてしまつたのが運の尽き。

たつた一日で恐ろしく上達したUMP姉妹に日が暮れるまで追い回された。ほんとにギリギリ。一応日没をタイムリミットに設定しておいてマジで良かつた。一体何が彼女らをそれほど駆り立てたのか。

今日はG11の調子がいつもより悪かつたのだが、それが無かつたら本当にヤバかつたかもしれない。HK416はUMP姉妹のガツツに少し引いてた。

今夜ももちろんG11と一緒に寝袋で寝る。速攻でG11を抱えたまま寝袋に滑り

込んでファスナーを閉め一瞬で眠りにつく作戦だ。

Ψ月几日

朝、目を開けたら視界に山吹色が広がっていた。寝袋を完全に閉め切ついても、前面に開けられた無数のぞき穴から外を確認できるのだ。綺麗だなあとのんきにしばらく眺めたあと、それがUMP45の瞳の色によく似ていることに気づいて俺は寝袋ごと転がつてから寝袋から脱出し、その場を離れた。

真相はわからない。単純に何かオレンジ色の布が覗き穴に被さつていただけかもしれないし、朝日がこう、上手く屈折して俺の目に入りそういう風に見えただけかもしれません。

……なお、一番有力な説はUMP45が至近距離でじつとのぞき穴からこちら側をおつと怖いのでこれ以上考えないことにする。

今日の鬼ごっこは俺が鬼だ。連中もさすがに工場を走り慣れてきたようで、前回のようにひよいひよい捕まえられなかつた。結局午前中には全員を捕まえることができなかつたな。密かな目標だつたのに。

マジで飲み込みが早い。やっぱそちらの民生品上がりとは格が違うんだな。思つていたよりも研修がすぐ終わりそうだ。ていうか今更だけどこれ報酬とかあん

の？ 現状完全なるボランティアやないか。とはいえるこいつらの依頼主がどこの誰かもわからんし、一通り教え終えたらこいつらを通してなんか請求してみるしかないわな。

そもそもこいつらなんなん？ グリフィンに伝手があるのはわかるんだが、違法パツといい民生品上がりとは思えない超性能といい、なんかヤバそうだよな。念のためトンズラする算段くらいはつけておくか。

四月一日

奇妙な揺れを感じて朝目が覚めた。なんとなく嫌な予感を感じて身をよじると、何が高いところから落ちた。G11よ下敷きにしてしまつてしまふ。

寝袋から這い出てみると、どうやらUMP姉妹が二人で俺とG11の入った寝袋を担ぎだしてどこかへ運搬していたようだ。理由と目的を訪ねてもばつが悪そうに目をそらすだけで、結局何もわからなかつた。

寝袋が運ばれた先には食料と水を貯蓄している地下室くらいしかないんだけどな。

あそここの重厚な鉄扉は外からしか鍵を開けられないから、うつかり誰かを閉じ込めてしまわないように厳重注意したばかりなんだが、一体俺をあそこに連れて行つて何をするつもりだつたのだろうか。

UMP9が「縄を探してからやればよかつた」と言い残していたのが気がかりだ。ちなみその縄だが、昨夜HK416がかき集めてどこかに隠していた。理由は分からぬが俺はHK416に救われた気がする。拌んでおこう。

鬼ごっこは404小隊が鬼。鬼をやらせるのは今日が最後にした。

それを伝えるとはちゃめちやにやる気を出した。最後だから全力を出す為に気張つているのだろう。HK416は指示がいつもより冴えていたし、G11もセントリーガンもかくやという索敵能力を発揮した。UMP姉妹は鬼気迫るレベルで追いすがつてきたので、なんだかんだ言いつつも手加減していた昨日と違い俺も久々にマジになつて走つた。

危ない場面もかなりあつたが、幸運と偶然が重なりないなんとか逃げ延びた。次まともにやつたら絶対に捕まる。そう確信できた。まあ次なんてないんだけどな！ふと思いつ立地、地下室の鍵をHK416に預けた。なんとなくそうした方がいい気がしたのだ。野生の勘つてやつだな。寝袋も使うのはやめた。今晩はひさびさの高級口イヤル寝具の出番だ。全然暖かくない。泣きそう。

# 六冊目

Ψ月♪日

昨夜、どういう風の吹き回しかG11が広くなつた寝袋を独り占めすることなく俺のスーパーハイグレード寝具で寝ることを所望したので歓迎して布団に入れてやつた。G11のぬくもり好き。安眠のお供。

朝になると昨日まで使つていた寝袋からご満悦の表情をしたUMP9がホクホクしながら出てきた。寝る前に随分と白熱したじやんけん勝負をしているなとは思つたが、寝袋の使用権を賭けて争つていたらしい。

一方のUMP45は俺の上着にくるまつてソファでしぶしぶと夜を過ごしたようだ。あの上着はHK416の服の修繕に使つたやつだな。大胆に引き裂いて材料にしてしまつたのでもう服としては使えないが、貴重な上質の布なのでどつておいたのだ。いつの間に45は確保していたのだろう。

なんかもう教えることないし訓練考えるのもだるいので実戦することにした。食糧も減つてきたことだし渡りに船つてことよ。

しかし本当に戦闘マシーンと化したG11は凄まじいな。今のところ敵に回したく

ない度N.O. 1だ。ちなみに二番はH.K.416。丁寧かつ徹底的で容赦がない。U.M.P.姉妹はもとから実質敵みたいなもんなのでランギング外です。

手ごたえのない戦場を散歩していくもしようがないのでちょいと深入りしてみた。全員かすり傷程度にはダメージを負っていた。ちなみに俺が一番傷だらけなのは最前线で弾避けしていたからね、仕方ないね。

丁度いいので404小隊は全員一度依頼主の元に帰るそうだ。たぶん定期メンテとかそういうんだろう。明日の朝には合流ポイントへの移動を始めるそうだ。この工場も静かになるな。

実をいうと都合がいい。実は今日、腑に落ちないことがあったのだ。それを確かめに、明日はもう一つの廃工場を漁つてみようと思う。

さて今夜は一人で寝袋で寝ることにした。愛しのG11離れをするためのリハビリである。早く慣れなくては。

Ψ月1日

とてももなく窮屈に感じる寝袋の中で目が覚めた。G11はいなから窮屈に感じるはずはないのに、どうしてこんなに俺の臓腑と骨々が悲鳴を上げているのだろう。そう、身に覚えのある感触だつた。

嫌な予感をひしひしと感じながらも目を開けると、UMP45と目が合つた。寝袋の中で。耳元からはおはようと囁くUMP9の声が聞こえた。

ありえないと思つた。入りきるはずがない。小柄なG11でさえギリギリだつたのに。あとで聞いてみると、俺が寝ている最中に寝袋を裁断し、内側に入り込んだうえでHK416に外から縫つてもらつたらしい。そこまでするか普通。

その時の俺の絶望感は筆舌に尽くしがたい。なにせ通常ですらまず脱出できないUMPサンドだというのに、今回は寝袋という閉鎖空間。圧迫力もマシマシだつた。脳裏をよぎつたのは脱出不可能と絶体絶命という二つの言葉。

三途の河が見えてきたあたりで俺もいよいよここまでか感もあつたのだが、なんところでG11が寝袋の酷使に立腹し救助してくれた。あのG11が自発的に、だ。信じられない。でもこの寝袋もつてきたのG11だからな、そう考えると納得できる。寝袋がはちきれるのも時間の問題だつたからな、よく一晩持つたものだ。もし45のバストサイズがこれより僅かでも大きく設計されていたらぜつた（インクが滲んでいてこれ以上読めない）

δ月J日

俺はどうどう学習した。奴があざかり知らぬ場所であろうとなかろうと、絶対に胸の

話はタブーだ。殺意が形を伴つて飛んでくる。

そんなことより、今日は404小隊出立の日だ。途中までは同伴してやつた。これだけ一緒に暮らしたりあれこれ教えてれば流石に情も湧くつてもんよ。機密漏洩的問題で合流地点までは一緒に行けなかつたが、まあ十分だな。別にこれが最後の別れつてわけでもなし。俺が命を預けた愛銃を引っ提げるので、大切にするように言い含めておいた。まあ粗末にするわけないか。よもや手のひらに銃を立てて倒さないよう遊んだりせんだけれど。

奴らを見送ったあとは例の倒壊した鉄血人形工場に足を運んだ。予想通り、目的のものは見つかつた。

万が一を考えて日記に詳細は残さないが、完全にクロだな。どいつもこいつも腹に一物抱えてて嫌になつちやうわ。

6月14日

404小隊が帰つてきた。はええよ。一泊しかしてないじやん。俺はてつきり一週間強はあると思つてたよ。最低でも三日くらい。

しかも編成拡大まで済ませちゃつて。どうすんだよこんな大所帯。

だが連中にとつても予想外だつたらしく、なにか突発的な問題が発生して急遽送り返

されたらしい。それにしては外装まできつちり新品同然じやん。416の服装も俺の上着の布をあてがつた不格好な奴じやなくて新調済み。と、思いきや前のはまだとつておいてあるらしい。あれは勝負に出る時の一張羅だそうだ。しかしあんなボロくなつたのでいいのか？ 完璧を好む416らしくもないが、まあ本人なりのこだわりがなんかあるのかもしぬないので余計な口は挟まなかつた。

しつかしどいつもこいつも装備まで質のいいやつ揃えちゃつてまあ。雇用主の期待の反映つてことかい？ でもさつそくグダグダに着崩してG11には安心した。やっぱお前はぶれないよ。

あと、依頼主から研修の報酬として荷物が一緒に運ばれてきた。中身はようわからん機材。ごちやごちやコイルが巻かれててアンテナが伸びてる。これ開封してから人形たちの様子がおかしいんだが毒電波とか出てない？ 大丈夫？

y月π日

マジ404小隊のバツクについてる奴の性格悪すぎでしょほんまぶつころ。あの毒電波装置はたぶん人形のA.I.に干渉して親愛度だか好感度だかの値を逆転させる装置だ。

愛を謳いながら発砲してくる404小隊から死に物狂いで逃げてきたわ。あいつら頭の中で何がどうなつてんの？ 反転どころじやなくない？

あの装置だが十中八九死んだ方の天才の遺物だろう。I.O.PのA.I.にちよつかい掛けられるようなやつがゴロゴロいてたまるか。妙に作りがずさんだつたのは蝶事件でまともな状態の残つてなかつたから突貫工事の修理品つてとこか。

俺が廃工場でヤバ目の証拠掴んだのが向こうにバレて、慌てて何も知らない404小隊を武装させて俺を始末させる気だつたようだ。  
でもお前そのやり口ほんま。良心のブレーキついてる？ 記憶処理とかもつと穩便に済ませる選択肢なかつたの？

とはいっても、そもそも大層な機密部隊の教育に俺のような根無し草を選択してゐる時点で最初から処分する気マンマンだつたんだろうな。

それが分かつていてから俺もトンズラこく準備をせつせとしてたわけだしな。  
しかし完全に追跡の教育を施したのが裏目に出たぞ。何発かおいしい鉛玉をもらつてしまつた。おじさん々々に流血しちやつたぞ。  
しかしそれなりの生活基盤が整つてたあの廃工場ともおさらばかあ。

はー、明日からどうしよ。

## 七冊目

γ月γ日

一日経つたが特に追手は来ない。なんとか撒けたようだ。身代わり人形の被弾と共に血糊をばら撒きながら川に落ちたのが良かったのだろう。この時の為にせつせと鉄血人形の血液を集めておいたのだ。他の指とか骨とかの生体部品もぶちまけたので相手方は死を確信したはず。

弾がまっすぐ飛ばないUMP40だけを頼りに街をさまよい、かろうじて見つけたのが崩れかけた高架下。前とは比べ物にならないくらい酷い環境だが雨をしのげるだけマシと考えよう。上手いこと瓦礫と風向きがかみ合えば風だつて凌げるしいけるいける。

γ月γ日

いやあ、状況が悪いぞ。持ちだした食料や弾薬もそう多くないし、鉄血から奪おうにも工場近辺よりも数が多いんで迂闊にちよつかい出したら余所からもわらわらと呼び寄せてしまうおそれがある。隠密に戦闘をしようにも武器がこれじやあなあどうにも

ならん。空き缶で作った即席ナイフで一小隊相手に無双できるほど強くないし。

とはいいつつも、何か対策を立てないと状況は悪化するばかり。とりあえずこそこそ廃屋になつた民家でも漁つてみるか？ だとしてもまず民家を探すところからして難易度高いんだよなあ。

とにかく明日は周辺をほつき歩くところから始めるか。

γ月Σ日

物資的な収穫は無かつたが、情報的な収穫はあつた。

どうやらこの辺りは鉄血側とグリフィン側で小さな戦闘がちよいちよいあるらしい。なにやらどちらにとつても主導権のある地域ではないようで、だからといってさほど重要でもないので維持するほどでもないとみた。

ただ万が一に備えて占拠だけはされないようにパトロール走らせては小規模な遭遇戦が勃発してゐる感じだな。

これはひよつとしてもつと強気に外を歩いてみてもいいかもしけんぞ。

しかし、あれだな。404小隊と離れてからは日記に書くことが減つた。前までは收まりきらなくらいだつたというのに。いやあ、あの賑やかさも短いながらに悪くなつたが、楽しい時間は夢いものだ。まあ、あの生活が二度と帰つてくることもないだ

ろうし割り切るしかないね。



頭に靄がかかつたように感じる。うまく思考が働かない。

ただ、どうしようもなく——この人を殺したい。

そして、この耐え難い衝動を抱えているのは私だけではないらしい。404小隊の皆が一様に彼に銃口を向けている。無論セーフティを外し、リロードを済ませ引き金に指を掛けた状態で。

「オイオイオイ、マジかお前ら」

私たちの届けた荷物をざちやざちやといじつていた彼が、ぎょっとした表情で振り返った。殺氣を隠すような真似はしていかつたけれど、それを差し引いても凄まじい反応速度。流石という他ない。だがこれほどの人数から純粹な殺意をぶつけられてなお、彼は自身のペースを崩さない。

「うわあロジックボム的なやつ？なんかへんなスイッチ入れちゃつたかな。おーい聞こえるかー？銃は人に向けて撃っちゃいけないんだぞー」

「ねえ、指揮官」

「おおナイン。突然だが二階のロツカーの中にチヨコレート味のレーシヨンを隠してあるんだ。さてここで物は相談なんだがそれと引き換えに「指揮官」

「な、なんでございましょうか」

「今から指揮官のことぐちやぐちやにしてあげるから、頑張つて抵抗してね……？」

「ちよつと何言つてるかわからないですね」

彼はどうにかこの場を穩便に済ませたがつてているようだけど、もはや誰も取り合わないだろう。だつて、彼が愛おしくてたまらないから。この愛を伝える為に彼を殺す。

しかし、事前に示し合わせたかのように誰も発砲しない。ただ彼を殺すだけでは、意味が無い。それではまるで飽き足りない。一方的では、一方通行では意味が無い。

私は、私たちは私たちを殺そうとする彼を殺したくてたまらない。なぜとかどうしてとかそういう次元の話ではないのだ。

ただ、この溢れんばかりの想いをぶつけるにはそれが一番だと。他の方法ではダメ。これしかないと、なんの根拠もなくそういう確信があつた。

「指揮官、銃を取つて。私たちはあなたを殺したいの」

「わかつたわかつた観念しよう。弟子が狂えば、始末は師の役目つてな。いいぜ、相手になつてやる」

彼が肩に下げるUMP40をそつと手に取つた。彼がやる気になつたのだ。途端に空間に緊張が走る。いや、それは私たちだけだ。彼は未だにいつもと変わらぬ調子を貫いている。

さあ、彼はこの絶対絶命の状況でどう動く？　どう切り抜ける？

どう足搔こうともここで殺す。一拳手一投足を見逃すまいとじつと見つめて――

「ちよいと見過ぎたな」

瞬間、彼の背後の機械群が眩い閃光を放つた。

「フランシュ!?」

「誰がマジメに戦うつてんだバーカバーカ！　うははは！　あぶなつ！　撃つた！　今殺す氣で撃つたね！」

視界を塞がれつつ咄嗟に発砲するも、既に荷物を引き倒して射線を遮つている。恐らく、彼が荷物を弄り始めたころには私たちの殺意の萌芽に気づいていたのだろう。いや、もつと前にこのような事態を想定していた？　何にせよ取り逃がすわけにはいかない。視界が回復し次第すぐさま彼の痕跡を見つけて後を追わないと。

「今度は煙幕……！」

閃光に目が慣れ始めた頃には、一面が白煙で包まれていた。発生源は運んできた荷物。彼がバッテリーの代わりに欲しいと要望していたものだ。あまりにも周到すぎる。やはり彼はもつと前からこういう脱出せざるを得ない状況に備えていたんだ。連續の攪乱だ、こうなつてしまふと単純な指令でしか動かせないダミーはもう使い物にならない。

「あ、見つけた。上の窓だよ」

G11が眠そうな声と共にそつと指をさす。見れば先ほどまで閉まっていた窓が開いている。この煙幕の中にありながら驚異的な観察力。やる気さえあれば、本当に頼りになる。

「訓練と一緒に、9と45は真つすぐ追いかけて！ G11は高いところへ、私は迂回してルートを限定するわ！」

416の指示が飛んでくるのとほぼ同時に全員が駆ける。セオリーは全員頭に入つていた。彼の訓練の賜物だ。

窓を抜け工場の屋上まで出ると、やや遠巻きながら彼の姿が目に入った。

「ゲエーツもう見つかっただけでも寝袋の中に封印しつきやよかつた！」

全力で追いかけるも中々距離が縮まらない。訓練の時にはただ走るだけだったが、今

日の彼は工場の資材をばら撒きながら建造物の隙間を縫つて走る。ひとたび障害物に足を取られれば、次の瞬間ににはもう違う高さの場所にいる。走る速さは訓練の時と変わらないが小手先の技術が盛り込まれていた。今日の彼はやはり本気だ。きっとこれが彼の戦い方。彼の命のやりとりなんだ。だつたら本気で逃げる彼を、追い詰めて追い詰めて追い詰めて殺そう。それが私たちの愛の証明。

愛に、愛に応えなければ。

「はーいこちらのパイプはおひとり様までとなつております!」

屋上から隣の建築物へ続くパイプを渡つた彼が、渡りきると同時に足場を破壊した。跳んで届く距離でもない。このままでは確実に見失う。そうなつたらもう私たちで見つけ出すのは不可能だ。

「416!」

『左側から回り込んで! 右側の出口は瓦礫で塞いだから間に合うはずよ!』

『正面玄関は大丈夫なの!?』

『私が見てるよー。まあ向こうも分かつてるから顔は出さないとと思うけど……やっぱ、ねむ』

『ちよつと! 寝ぼけて見逃すとかシャレにならないわよ!』

『だいじよぶだつて、一瞬でも視界に入つたら覚醒するから。たぶん』

通信の内容に一抹の不安がよぎつたが、彼女らの言葉を信用して迂回する。彼の渡った建物は三階建てだ。下から登つていけば途中で遭遇するはず。416の指示に従い迂回し階段を駆け上ると、二階の渡り廊下で無事に彼の姿を確認できた。

「キャーッ！ 柱ぶつ壊してまで道塞ぐことなくないですか!? 建物は大切にしろオ！」

健全な状態で残つてゐる建物は珍しいんだぞ！」

「指揮官」

「ひつ」

愛しい彼を甘く呼びかけながら引き金を引く。彼は咄嗟に積まれたボックスの裏に転がり込んで身を隠した。弾幕を展開しながらじつと距離を詰める。背後は行き止まり、顔出せば即被弾。彼にできる行動はない。

「リロード！」

「任せて姉さん！」

私が弾切れになつたと同時に9が発砲を開始する。こういう一方的な状況で制圧射撃を行う場合は、弾幕が途切れないとリロードのタイミングは私と9で僅かにずらす。セオリ一は頭に入つていたが、実戦での活用方法は彼に教わつた。そしてそれを、他でもない彼を追い詰めるために使う。

「えへへ、えへ、指揮官……好き、好き、好き、好きつ好きつ好きつ好きつ好きつ

好きつ好きつ好きつ好きつ好きつ好きつ好きつ好きつ好きつ好きつ好きつ好きつ

「わあっ！」

半ばトリップしているナインを横目にじりじりと間合いを詰め、もうすぐ——  
「よいしょおつ！」

「わあっ！」

威勢のいい掛け声とともに、彼の隠れていたボックスが飛んで来る。

「いたずらに声を出して距離を教えたのが仇となつたな！ 銃声よりもほど恐怖を煽られたわ馬鹿もんがあ！」

大きなダメージにはならないが、ナインは体勢を崩し、私はまだリードが完了していない。制圧射撃が途切れてしまつた。だが、これで彼には遮蔽物がなくなつた。不安定な体勢ながらも、すかさず缶で作つたインスタントナイフを投擲する。この即席ナイフを彼に教えてもらつた時は実用面において懷疑的だつたが、なるほどこれは悪くない。

「甘いわ！ 秘儀畠返し！」

「うそ!?」

直撃の確信があつたが、彼は足先だけで床に敷き詰められた木板を翻して立て、ナイフは力力カカツという小気味のいい音と共に防がれた。

「アディオス！」

面食らつた一瞬の隙を突き、彼は窓を突き破りこの袋小路を脱出した。私たちもすぐさま彼の姿を追い、窓から飛び降りる。

だが二階からの着地で、僅かに足がしごれる。彼との距離が離れる。リロードはまだ行つていい。このままでは、彼に逃げられる。

彼がいるのはこの工場と市街地を繋ぐ鉄橋だ。あの橋を渡つて市街地まで抜けられたら、もう追うことはできない。今回だつて走り慣れたこの工場内だつたからこれほど上手くできた。この工場より複雑で、土地勘のない市街地まで逃がしたら、おしまい。ダメ、それは絶対にダメだ。ここで逃がすわけにはいかない。急いでリロードを済ませないと。まだ全然愛し足りない。もつと愛さなきや、もつともつと……！

### ——バヌツ

前触れのない、重い銃声。突如彼の右足から鮮血が滲み始め、彼は勢いのまま派手にこけた。

「指揮官、私指示するだけが能じやないのよ。忘れてたでしょ？」  
「つ！」一本取られたね。あー……やば

416の声だ。確かに、訓練中に彼の追跡に彼女が加わったことはなかつた。常に先

回りや破壊工作がメインで、指揮官も彼女の存在が頭から抜けていたのだろう。

苦痛に呻く彼の表情が見えた。被弾した足を引きずりながら、どうにか物陰に身を隠そうとしている。とても苦しそう。かわいそうに。樂にしてあげなきや。

もうあの傷では走ることはできない。彼の負け。あとは、私たちの愛を受け取つてもらうだけだ。ゆっくりとリロードしながら彼の下へ近づく。もう416もG11も集合していた。

途端、無防備のまま物陰から彼が飛び出してきた。

やつと観念したんだ。私たちの愛に身を委ねる気になつたんだ。彼の期待に応えよう。容赦はない。私とナインで両足を銃撃し、416が心の臓目がけて発砲し、そしてG11が彼の頭を吹き飛ばした。

痛快なまでに鮮血が舞う。ついにやつた。彼を、指揮官をこの手で殺した。彼から教わった技術を駆使して、彼を、私たちの指揮官を殺したんだ。

でも、おかしいな。

——全然、嬉しくない。

ばんやりと、人間を殺すと鉄血人形より血がいっぱい出るんだなあ、つてくらい。まるで感動しない。なんでだろう。あんなに殺したかつたのに。やつてはいけないことをしてしまつたような。一番やりたくないことをしてしまつたような。

…。

そつか。そうだよね。

私は指揮官を殺したかつただけで、死んでほしかつたわけじやないんだ。  
だから、いま私はこんなに空虚なんだ。

まあ、そんなことより！

ついに指揮官に黒星をつけることができたんだ。今まで惜しいところまで行つて  
いたのにあと少しで届かなかつたからすごく嬉しい。

そういえば任務を達成したからだろうか、だんだんと靄の掛かつていた思考が晴れて  
いく。

ああ、いつもの反省会が楽しみだ。何度か出し抜かれちゃつたけど、最終的には私た  
ちが上回つた。きっと褒めてくれるに違ひない。

そうだ、今日こそは指揮官に頭をなでてもらおう。前は視線で訴えるだけで済ませた  
ら、結局ナインだけで私にはしてくれなかつた。もう、意外と恥ずかしがり屋さんなん  
だから。

あと教えてもらいたいことや聞きたいこともたくさんある。一番最初の閃光は一体  
どうやつたんだろう。あの煙幕は何を使つたの？ いつから襲撃を察知していたんだ  
ろう。なんであれだけ殺氣をぶつけられても動じなかつたのかとか。そういう、あの罫

返しと呼んでいた奥義も練習したい。

そんなことを考えながら指揮官の側まで駆け寄ろうとして  
——おかしなものが視界に映った。

散乱した肉片に頭蓋骨の破片。それから人の皮。地面上に広がった血の池。  
その中心に横たわるのは、見覚えのある服を着た肉の塊。  
あれは、何だ？

——私たちは今、いつたい誰を殺した？

# 八冊目

ぐ月10日

足りないものが多すぎる。というか一番最初の生活レベルが高すぎた。いきなりあれに慣れてしまつたのは本当に良くない。ここは屋根はあっても壁がないからなあ。瓦礫は壁に含みません。

何はどうあれ布団が欲しい。贅沢を言えばふかふかしてもふもふしたやつ。寝袋とかソファとかあつたから勘違いしそうになるが、俺のスーパーハイグレード寝具は負け惜しみなどではなく本当にロイヤルだつたんだ。くそ、ダンボールの一枚でもあれば違うんだけどな。着替えはダミー人形に着せてしまつたので手元にないし、もし回収できただとしても破裂した生体部品でぐつちよぐちようだらうしな。

とりあえずは水と飯だ。俺の韋駄天の足が健在であれば鉄血かグリフィンの飛行場からちよろまかしてやるところなんだが、傷口が開いたら困るしなあ。

ぐ月 日

このままでは野垂れ死んでしまうぞ。非常に癪に障るがグリフィンに回収してもら

う選択肢も視野に入つてくる。脱走しておきながらどのツラ下げてつて話だが、流石に命には代えられないからな。

でもそれは本当に最後の選択肢だ。あそこに戻つたらまた地獄のローテーションが組まされるに違いない。もつとも今はカリーナ一人で回してんだろうけどなH A H A H A ! 戻つたら恨みから刺されるような気がしてきた。マジでこれは最後の手段になるな。

5月 4日

さて肝心の食糧問題だが、なんとかなつた。名付けて『今の人お前の知り合いじゃないの』作戦。鉄血と交戦しているグリフィン部隊に飛び入りで参加してそれっぽく指揮して戦利品の回収中にすーっとフェードアウトする作戦だ。グリフィンに所属してゐる人形なら誰だつて俺を知つてゐる……とはいかなまでも、なんとなーく見たような顔だよなあくらいの知名度なので他の作戦中のついでにちよつとお手伝い的な雰囲気を醸し出しつつ助太刀してきた。

4 0 4 小隊に命狙われたばかりなのに迂闊すぎるかもと考えもしたが、たぶんへーき。まあどこかで見たような顔がいるつて都市伝説になつてるかもしけん。

く月α日

なんでここに404小隊がいるんですかね（震え声）



「あ……え……？」

これは、何。

……人だ。指揮官の服を着た、人間だ。

死んでいる。

「指揮官……？」

自分の口から、信じられない言葉が飛び出た。指揮官？ 私は今、指揮官と言ったか  
？ どうして今指揮官を呼んだ？ 指揮官なんてどこにいる。

それともまさか、このみすぼらしい肉塊が指揮官とでも？ そんな。ありえない。

視界が揺れる。違う、私の体が震えている。何が起きている？ 私はさつきまで何を  
していた？ 誰を追っていた？

記憶がはつきりしないのはあの奇妙なアンテナを開封してからだ。気づけば一晩中彼の寝顔を見つめ続けることで抑えていた想いが止められなくなってしまった。秘めていた想いを殺意に乗せてぶつけたくなった。

それで無我夢中になつて、じゃあ。

この返り血は、血だまりは、死体は。

指揮官の、もの？

「あ……う……」

嘘だ。ありえない。何かの間違いだ。

殺しても次の瞬間息を吹き返して氣色悪いダンスをしながらその場から走り出しそうな彼が、死ぬわけがない。

そもそも一体誰が彼ほどの実力者を殺せる。彼の逃走術は目を見張るものがあつた。

そこらの有象無象に彼が殺されるものか。

でも、あるいは。ずっと彼を側で見て来て、彼の癖を知り尽くして、彼の考え方を直々

に指導もらつた私たちなら。  
殺せるかもしれない。

違う。

殺せた。

——そうだ。私が殺した。

私たちが殺した。

「指揮官。私ね、とつても素敵なことを思いついたの……」

ナインの声だ。

「指揮官。ねえ指揮官。家族つて、同じ血が流れてるんでしょ？ 血がつながってるんだよね？ じゃあ、これで、本当の家族だよね？ ずっと一緒になれるんだよね？」

ナインが足元に広がる血溜まりを懸命に手で掬つて啜り始めた。何度も、何度も。この血の池を飲み干すように。

「指揮官、私ね、お裁縫を練習しているの」

HK416の声だ。

「お裁縫だけじゃないわ。お料理に、掃除に簿記の管理だつて。こういうの、昔は花嫁修業つて言つたんでしょう？ 私が全部管理してあげるから、私ひとりでなんでもやつてあげるから、私だけを見ていいればいいの。もう何も考えなくともいいのよ？」

飛び出した目玉を、愛おしそうに熱のこもつた視線で見つめている。艶のない眼球に、色のない瞳が映つていた。

「指揮官、なんで。冷たいよ？ 今夜はどうしたの？」

G11の声だ。

「こんななんじやあつたかくないよ……指揮官。あ、また。もう、指揮官つてばどこいくの?  
一緒にねようよ……」

あたりに飛散するピンク色の肉片をかき集めて抱きかかえ、語りかけている。やがて抱えた肉片をぼとぼと取り落とし、またかき集めては抱きかかえ、言い聞かせるように語りかけている。まるで赤子でも抱くかのように。

何もわからない。

何が起きている? みんなどうしてしまったの?

体の震えが止まらない。視界が突然低くなつた。足に力が入らない。膝が崩れたんだ。

視界の焦点が合わない。

指揮官はどこ?

——指揮官の服が見える。

あれは指揮官の服だ。

じゃあ、あれは指揮官だ。

なんだ。指揮官は生きてるじゃないか。

きっと疲れて、横になつてしているだけ。

そうだ、指揮官の顔が見たい。

きっとあの緊張感のない顔が見れる。

そんな指揮官の顔を見たら、きっと安心する。

「し、きかん……」

力の抜けていく体で、それでも這いすつて近づく。

きっとこの震えも指揮官の顔を一目見たら収まる。

腑抜けてだらしのない、あの人顔を。

優しくて面倒見の良い、あの人顔を。

どうか、一目だけでも。

「指揮官……指揮官……おねがい……顔を見せて……！」

彼の体にしがみ付いて、するようすがるに掴みながら、服が血に汚れるのも厭わずに顔を覗き込む。

けれど。指揮官に——もう頭は無かつた。

違う。  
待つて。

おかしい。

これは、指揮官ではない。

……本当に、やつてくれるわ。私たち、またあの人に出し抜かれたのね。

「起きろ！」

声を張り上げ、皆の意識を叩き起こす。

「さつさと目を覚ましてもう一度よく見なさい。全部作りもの。あの人はまだ生きている」

私の喝で、冷静を取り戻させる。指揮官をこの手で殺めたという動搖があつたから、こんなチープな舞台道具に騙された。いつもの私たちなら、彼と過ごし続けた私たちなら、すぐその綻びに気づける。

しばらく、静寂が続く。

やがて、ナインは口に含んだ血液を吐き捨てて言つた。

「やつぱり？ どうりでまずいと思つたんだよね」

H K 4 1 6 は人形の眼球を片手で握りつぶして言つた。

「彼の瞳がこんな薄汚いわけないわよね」

G 1 1 は肉片を踏み躡つて言つた。

「やつぱり私が抱くんじゃなくつて、指揮官に抱きしめてもらわないと」  
皆の瞳に光が戻つた。

今度は、その内側に滾るような情念を蓄えて。

もう、大丈夫ね。じやあ。

私たちがやるべきことはひとつ。

「——指揮官を、探しに行くわよ」

次は絶対に逃がさないから。

# 九冊目

ぐ月〇日

焦るわ本当に。404小隊が俺の過ごす高架の上を歩いていた。なんでバレなかつたのかわからんぞ。奇跡だ奇跡。

なんか誰か橋の上歩いてるなーと思いながら息を潜めていると、聞き覚えのある声がしたのだ。まあばりナインの声だつた。

一瞬身構えたが、時間や距離的にあの電波の効果も切れているのかもしけないと思い、会話から情報を集めようと耳を澄ましてみると、聞こえてきたのは「はやく指揮官と本当の家族になりたいなあ」という言葉。

俺の生存を確信していないと出てこない言葉である。やはりあの偽装は多少の時間が稼ぎくらいにしかならなかつたのだろう。まあ、あれは単に注意をそらしてあの場を脱出するためのものだしそんなもんだよな。しかしこの段階ではまだ洗脳が解けているかどうかわからなかつたので、彼女たちが雑談しているのをいいことに俺は更なる情報を求めてみた。

そして聞こえたセリフがこちら。

「やっぱり血が欲しいなー」

不穏だつた。

移動中の雑談でどうして血が欲しいという言葉が。なんかそういうのに目覚めてしまつたのか。お父さんそんな風に育てた覚えはありませんよ。それとも俺の似姿を殺したことで何か新しい世界への扉を開いてしまつたのか。じゃあ俺のせいじやん。

しばらく聞き続けてみると、他のメンツから「手錠これだけで足りるかしら」とか「絶対に脱走できない場所に監禁すべき」やら「薬を盛れば一日中一緒に寝れるのでは」etc.

これは正気に戻つてませんね（確信）

×月、日

参つたことに404小隊は俺が近くにいることを察しているらしく、この市街地で本格的に捜索を始めるつもりのようだ。

見つかつたら何されるか分かつたものではないので、急いで荷物をまとめ高架下から離れた。きっと次からはUMPサンド程度では済まされないだろう。もつと、こう、俺の想像力では思いもよらないようなすごくてえぐいやつが待ち受けているに違いない。せつかくこの高架下暮らしにも慣れ始めてきたのになあ。痕跡は消したつもり。

しかし、これは予感なんだが俺がここに居たことはバレる気がしてきた。臭いとかで。不安になつたので水とか撒いておいた。貴重な水だが、背に腹は代えられまい。

次の拠点はボロ家。前にグリフィンとしれつと共闘したときに見つけたのだ。状態もなかなか悪くはない。良いとも言えないけど。

ただ、困つたことに先客がいた。はぐれ人形つてやつだ。名前はM249。メモしておいたから覚えていたぞ。

指揮官がいなくて戦闘行動ができないというのに、ほぼ弾切れ同然だそうだ。世間一般ではそういう状況を詰みつていうんですよ？ 当人はフーセンガム膨らませながらソファで横になつてたけどそんな場合じやないと思いました。

いや、むしろそこまで何もできないとそうするのが正解なのか？

ちなみに俺が来たところで状況はなんら好転しないことは伝えておいた。弾がないんなら俺が指揮したところで意味ないし。

その日はとりあえずシェアハウスして夜を過ごした。

×月 日

俺は感動した。昨日の晩、俺の寝具・オブ・エレガンスを目ざとく見つけたM249の私も布団に入らせろという主張が激しかつたのでしぶしぶ入れてやつたのだが、奴と

一緒の夜はそれはもうふかふかのもふもふであった。寝ぼけてサブミッショソにしてこないし、UMP姉妹よりも柔らかいので（どこが、とか何が、については明記しないことにする）至福のひとときであつた。流石にぐでぐで感はG.I.Iに劣るもの、申し分ないレベル。

我が理想郷はここにあつたのだ。

当人の性格もぐんにやりした無気力っぴりで、付かず離れずの距離感が心地いい。こういうのでいいんだよこういうので。

俺の大切な寝具・オブ・チエリーブロツサムのありがたみを理解しているというのも加点ポイント。以来しきりに一緒に寝たがつていたからな、話の分かる奴だ。

気分がよかつたので貴重な食糧もふんだんにわけてやつた。なによりかけがえのないルームメイトもあるからな。円滑な関係を築きたい。

ただよろしくないのはこいつと一緒にいるとなんだか俺までぐでぐでしてくることか。今日は何もせずM249と一日ごろごろして終わってしまった。なんて贅沢な時間の使い道。ぶつちやけよろしくない。あいつ何かついぐだぐだしてしまう特殊な力場とか発生させてるんじやなかろうか。

そんなことをしていたのでM249とは昨日の今日で猛スピードで親密になつた。ただ、懐き方が404小隊を彷彿とさせるのだけが気になる。たぶん氣のせい。

### 追跡ログ（筆記者：U M P 4 5）

彼を追うにあたつて、まずは記録をつけることにした。彼が日記をつけるのに習つてみた。その日に得た情報をこうして媒体に出力することで、何か見落としていたものに気づけるのではないかという試みでもある。

私たちはまず、彼の持つU M P 4 0が見つからないことに気づいた。彼は自分の持ち物は大切にする人だ。それは私たちに託されたこの銃が物語つている。

同時に私のコードネームであるこのU M P 4 5というサブマシンガンのかつての持ち主は、他でもない彼だ。この銃もボロボロのゴツゴツで、傷だらけ。『汚い』というより、『酷い』という表現がふさわしい域まできている。けれど、手に取つてみればよく手入れされ、使い込まれているのがわかる。新しいものを用意せずに最低限の範囲でパーツを交換しつつ使い続けているのもそうだ。

……彼はU M P 4 5を大切にしていた——と書くとちよつと口元がにやける。でもこれは事実だから。何もおかしなことはない。ないつたら。

閑話休題。

自分の死を偽装するための人形にUMP40を持たせなかつたのはすぐにバレるとわかつていただからだろう。死の説得力を増すことをせずUMP40をどこかいい加減な場所に捨てたというのは考えにくい。恐らくまだ自身で持つてゐるはず。ということは、彼は武器が必要な場所ないしなければ危険な場所に向かつたと思われる。彼も何か蓄えのある様子ではなかつたから、一度にそれほど遠くまではいけないはず。

やはりというべきか、通りがかつた高架下から指揮官の痕跡は見つかつた。

とはいゝ、ただ指揮官の匂いがするというだけなんだけれど。最初に気づいたのはナインだつた。普段から指揮官に飛び込んでいたので、嗅ぎなれていたのかも知れない。そして指揮官の匂いで間違いないと証言したのは416だつた。

一部とはいゝ常日頃から指揮官の衣服を着用している416の言葉だから、信頼に足る。

そうだ、ダミーに着せられていた指揮官の服も早く洗いたいわね。あんなに血塗れじやあ使用できないし。

そういうえば、指揮官の搜索は順調に進んでいるけれど、G11は胸騒ぎがする、今だけは寝てゐる場合ではないと言つて奮起してゐた。とても珍しい。ひよつとしたらG11にとつて何か良くないことがあるかも知れない。

例えば——指揮官がお気に入りの抱き枕を見つけた……とか？

# 十冊目

×月11日

決めた、俺は秘密基地を作る（ドン！）

これは別に突飛な決定という訳でもないのだ。おそらく、今後404小隊から逃げる  
ようにあちこちを転々としていたら水と食料の方が持たん。

肝心の場所だが、住宅街にある地下室のある一軒家を見つけたのでそこを利用する。  
地下への入り口は巧妙に隠した（つもり）。地下へ続くハツチの上に底をくりぬいた  
冷蔵庫を乗せてカモフラージュという寸法よ。まさか冷蔵庫の下にハシゴが続いてい  
るとは思うまい。いやーやっぱこういうの憧れるよねえ。

地下室以外には可能な限り生活感を排除し、この家もありふれた廃屋の一つという体  
を保つ。

さつそく基地を豊かにするために色々運び込もうとしたのだが、肝心の入り口が狭い  
ので持ち込めるものに制限が掛かるのが悩みどころ。M249も通るときに体のあち  
こちがひつかかると文句を垂れていた。いや、それは知らんがな。

## ×月全

街をここそこと歩いていたら、懐かしい連中と会った。現役時代に引き連れてた人形たちだ。抜ける直前の時期は同じグリフィンに所属していても顔を合わせる機会が滅多になかったから本当に久しぶりだ。などと気楽に考えて声を掛けたら、血相を変えて追いかけてきたのではちゃめちやにビックリした。体が反射的に逃走してくれたので捕縛されなかつたものの、油断していたので本当に危なかつた。

そうだよな、そういうば俺グリフィンから勝手に逃亡した身の上だつたわ。別に重要なデータを持ち出したりはしてないけど、捜索されていてもおかしくない。

だが404小隊との鬼ごっこ続きで研ぎ澄まされた俺なら逃走の一つや二つ楽勝ですよ。嘘です傷口開いてつらいです。

しつかり撒いたのを確認してから秘密基地に帰り、M249にくるまつて寝た。前までは同じ布団で寝ているだけだったのが、足を絡ませ腕を回しと日に日に拘束してくるようになつているのに不安を覚えないでもないが、この方が暖かいので気にしないことにした。

しかし、AR小隊つていうんだつけ？ 今はあのM4が隊長かあ。立派になつたもんだ。

俺の事追いかけてこなければもつと立派だつたのに。



「もー歩くのつかれたー……足が棒になっちゃう……」

倒壊した住宅街の一角。足を引きずるようになたのたと歩いていたG11が、指揮官を探し始めてからもう何度も度目かもわからない弱音を吐く。

「いいから歩く」

「うう……指揮官のどこにかかるう……」

とうとう歩くのをやめたG11に対し、416が慣れた様子で引つ張り無理やり歩かせる。これもまた、もう何度も交わされたやりとりだつた。

だが、今回は一味違う。

ふにやふにやになりながらなおも自分で歩こうとしないG11にとうとうHK416も呆れ返った様子で、繋いでいた手をぱつと放した。

前に進む力を全て416に任せていたG11は、引いてもらっていた手を突然離れてこけそうになる。

「いきなり離さないでよ、こけちやうじゃん」

非難の声を上げるG11に対して、HK416は無慈悲に告げた。

「そんなに歩きたくないなら、そこで寝てなさい」

「え、いいの？ やつたあ。じやあ指揮官見つけたら起こして……」

「何言つてるの、あなたはここに置いていくのよ。私たちも指揮官も、誰も起こしにこないわよ」

「またまたあー、そんなこと言つちゃつて」

「あ、そういうことならその寝袋は私がもつてくから」

「ナインまで！？ あれえこれ本気のやつ!? っていうか何で寝袋まで！」

世話焼きの416が本当に置いていくわけないとどこか軽く受け止めていたG11  
だつたが、UMP9の要求を聞き、冗談ではないと慌て始める。

「なんでつて、その寝袋に染み込んだ指揮官の色々を貴女が堪能しているのは周知の事実よ」

「ぎくつ」

「確かにG11の寝袋の独占は目に余るものがあるわね」

「え、ちよ、45まで」

「……」ろしてでもうばいとる

目の据わったUMP9の言葉を号令に、UMP9と45がG11の寝袋に飛びつく。

「！ やめろお、ひっぱるなあ！ うぐぐ、これはわたしのたからものなんだ、ぜ、ぜつ  
たいに渡してなるものか……！」

突如始まつた綱引き。UMP9も45も先ほどまでの冗談めいた口調に反して、寝袋  
を掴む手は爪を立て手首をひねり全身全霊で寝袋をひつたくろうとしていた。対する  
G11も先ほどまでのくたびれつぶりが嘘のように寝袋にしがみつき、地に足をつけて  
踏みとどまる。

今までにない気合を見せるG11は、驚くべきことに2対1という数の不利を覆し、  
綱引きの戦況を拮抗状態にまで抑え込んでいた。

「二人とも。ほどほどにしないとそれ破れるわよ」

「……くつ、仕方ないわね」

「た、たすかつた……もうやだ……早く指揮官を見つけて一緒にさなぎになりたい……」  
輪をかけてへとへとになつたG11がぶつくさ泣き言を零す。が、何かに気づき、咳  
いた。

「誰か来る」

先ほどまで騒いでいたせいで聞き取れなかつたが、確かに慌ただしい足音が近づいて  
くる。

現れたのは、焦燥しきつた表情の女性。黒い髪と眼帯が象徴的だつた。

「くそつ、せつかくあと一歩というところまで来たのに……！」

「つてM16じゃない。なにそんなに慌ててんのよ」

警戒して損した、とでも言いたげな表情で416が構えを解いた。

「……HK416か？ 悪いが今は構っている場合じゃないんだ」

「ふーん。ずいぶんと余裕がないのね」

「そうだ。頼むから邪魔をしてくれるなよ、今は手加減はできない」

「それ、今じやなかつたら手加減する気だつたつてワケ？ ほんつといちいちムカつくわね……！」

「……」

声を荒げる416に対し、M16もまた剣呑な表情で様子をうかがう。

「……別に邪魔なんてしないわよ。私たちだつて暇じやないんだから」

張り詰めていた空気がふつと元に戻る。M16もまた、事を穩便に済ますことができて安堵していた。

「助かる。人を追つているんだ。情報を提供してくれないか」

「面白そうな話してるじやない。私も混ぜてよ」

傍観に徹していたUMP45が会話に参加してくる。こういった実務的な交渉事では、必ずUMP45が先頭に立つようになっていた。

「で、追つてる奴は人間と人形どっち？ 性別は？」

「人間の男性だ。丁度416の羽織つているのと同じ——つ！」

416の服装に気づいたM16が途中まで言いかけて言葉を止めた。  
その視線は、416が着ている上着に向かっていた。

「？ なによ」

「なあ、一つ聞かせてくれ。416の上着。前は着ていなかつたよな？」

「まあ、そうだけど」

M16の震えるような声で投げ掛けられた問いに、416は困惑しつつも応える。  
「……それは元はお前の物じやない。合つてるか？」

「そうね。これ死体からはぎ取つたやつだし」

M16が息を呑んだ。何を察したか、UMP45はにやにや笑つている。

「次の質問だ。あちこちに血の染みが広がつてゐる理由は？」

「あ、これねえ。やつぱり着てる奴の心臓吹き飛ばしちやつたから。やつぱり氣になる  
わよね……」

HK416の気楽な返事とは対照的に、M16の顔色は悪い。

「最後に一つ。その服の持ち主と、お前たちの任務に関係は……あるか？」  
HK416よりも先に、UMP45が笑みを浮かべて答えた。

「YESと書いたら？」

# 十一冊目

前に彼に見せてもらった日記を解読した時から懸念していたことがある。

まだ彼がグリフィンに所属していた頃、あるいはそれよりもっと前か。彼には他の戦術人形を連れて前線に立っていた時期があるようだ。詳しい時期までは日記の文章から読み取ることはできなかつたのが悔やまれる。翻訳で精一杯だつた。

彼が元グリフィンであることを鑑みるに、率いていたのは無骨な軍用ではなく私たち同様の人を模した女性型であるはず。私たちよりも付き合いが長く、戦場を通して育まれた絆もあるだろう。私たちとて彼と同じ屋根の下で寝た関係だけど、彼の中で大きな存在になるにはまだまだ共に過ごした時間が足りない。きっと彼の部下であつた人形たちは、いつか必ず私たちにとつて大きな障害になる。警戒が必要だつた。

ましてや私たちは曲がりなりにも彼を手にかけてしまつた状況であり、是が非でも関係がこじれてしまうだろう。穩便に済む可能性は低い。

でも、彼を殺そうとしたという事実が、今は都合がいい。

彼が率いていた人形というのは、M16の焦りようからして現AR小隊のメンバーの可能性が高い。彼の失踪に対し彼女たちが捜索に充てられたのも、恐らくは前々から

縁があつたから。そして任務という大義名分の下活動している。任務に縛られるのは私たち404小隊も同じだけれど、いかんせん表のAR小隊よりは裏の私たちの方が活動に融通が利く。

ここで彼の当初の目論見通りに死を偽装できたら、AR小隊は捜索を打ち切らざるを得なくなる。彼女たちの特殊な立場から、彼女たちを破壊するような強硬手段は取れない。最も有力な方法が、AR小隊に彼を諦めさせること。それを、今やる。

——決着はここで着ける。全力で始末する。

私たちが殺した。そう思わせる。

HK416は私が会話に割り込んだ時点で目論見を察している。大丈夫、連携は取れる。

M16は聰い。だから明言は避ける。迂遠な表現で、ほのめかすに留める。焦燥して鈍ったM16の判断力を利用する。早とちりを誘う。情報を絞り、限られた知識から真相を探らせる。血に濡れた彼の服がある。私たちの服装もまた、血で濡れている。そういうヒントで、誤つた正解に導く。自力で考えを巡らせて得た答えをもう一度疑うことは難しい。それが賢しい者であれば尚更に。

「……」

M16は沈黙を貫く。知性の灯つた瞳だ。得られた判断材料が私たちの言葉を本当

に裏付けるものなのか、思考を巡らせて いるのだろう。

これは『試練』だ。乗り越えなければ、彼との蜜月が曇る。だが、慌てる必要はない。M 16には、じつと不敵な笑みを向ける。

私と彼は出会うべくして出会い、結ばれるべくして結ばれる。物事がそういうふう出来ている。『運命』が味方をして いる。

因縁は持ち込ませない。運命は変えられない。

お前たちの彼との縁は、ここで終わらせる。

「……いや、もういい。全て把握した」

息の詰まるような、絞り出すような声。まるで覇気のない声。  
それでいい。

枯れた諦観を抱いたまま、指揮官との別れを惜しめ。

お前たちが指揮官に会うことは、もうないでしようから。

「あっそう。じゃ、私たちはもう行くから」

「え、もう休憩おわりなのー？」

G 11の抗議は無視して軽く H K 4 1 6 に目配せをする。H K 4 1 6 が、羽織った指揮官の服に僅かにこびりついていた肉片——生体パーツをこれみよがしに払う。

——これで、とどめ。



『あ、やつと繋がった……。姉さん、一体今までどうしていたの?』

「悪い、404小隊と遭遇していてな。指揮官の事を何か知らなか聞いていた」

『404小隊と? それで何かわかつたの?』

「それを今から調べるのさ。一緒にSOPMODO IIはいるか」

『いるよー!』

音割れしそうなほどの大真爛漫な声。M4のマイクに強引に割り込んで話しているらしい。

「今から画像データを送る。見てくれ」

『お、なになに? 指揮官の寝顔とか?』

『残念ながら違うな。どうだ、届いたか?』

『とどいたー!』

『单刀直入に聞こう。……それは何だ?』

『え、なつて鉄血人形の生体パートでしょ? これがどうかしたの?』

「そうか。いや安心した」

『そうなの？ よくわかんないけど』

いやはや、我が小隊に鉄血人形の分解が趣味の奴がいて助かつた。私に違いは分からぬからな。本当、何が役に立つかわからんものだ。

「さて、皆に伝えなくてはいけないことが二つある」

『それっていいニュース？ それとも悪いニュースかしら？』

「AR15もいるのか。じゃあ良いニュースだ。指揮官の生存がほぼ確定した。この市街地に潜んでいるとみて間違いないだろうさ」

『本当!?』

『良かった……。でも、そうですよね。あの人気が死ぬとは到底思えませんし……』

『まあ、でしようね』

なんだ、AR15だけ冷静ぶつて。声が安堵で弾んでいるのが隠せてないぞ。本人は隠しているつもりなのだろう。面白いから言わないが。

「動かぬ証拠を残してくれたHK416に感謝しないとな」

『……どうしてHK416の名が?』

『それが悪いニュースに繋がるのさ。すばり、404小隊が指揮官の身柄を狙っている』

「さあな。だが随分執着している様子だつた。先を越されるとまづいかもしれない」「ああ、それと最後に一つ、笑い話だ」

『どうせ趣味の悪い話でしょ』

「404小隊の連中、指揮官の十八番の死体人形に一度まんまと騙されたらしい。

連中、私が嘘に気づいたと知らずに大真面目にペテンを続けるものだから、笑いをこらえるのが本当に大変だつたよ」

いやあ。傑作傑作。

# 十二冊目

N月9日

どうしよう。外に出られない。

404小隊とAR小隊がずっと街を探索しているらしい。秘密基地は見つけられていないのに、俺がいることだけは確信しているらしい。ナンデ。

AR小隊が俺を探しているということは、グリフィンの人形も情報を提供していると思つていいだろう。今までのようにして、れつと参戦とかやつてたら情報共有されたのち現場確保されそうで怖いんだよな。単純に姿をさらすのも大事をとつて控えている。

仕方がないので代わりにM249に街に出てもらつていてのが現状だ。M249なら発見されても通報されないからな。弾薬がない人形を送り出す鬼畜行為には心が痛むが、奴らに見つかったあとの自分の姿を想像すればそんな甘つたれた考えは吹き飛んだ。

N月5日

このままでは墮落する。俺はそう結論付けた。

日がなM249とふかふかの夜を過ごし、戦う術を持たないM249を危険な屋外に送り出し、俺はだらだらしながら食料類を待つだけ。これはイカン。ダメすぎる。

人と人形の関係としては本来これくらいが適當なのかもしれないが、俺の良心がずたずたに引き裂かれるのでダメ。

M249も自分が必要とされているのを感じてはいるのかまんざらでもない雰囲気だつたので、自分の意志で抜け出さないとずぶずぶ深みにハマる。

許されないことだ。何とかしなくては。

そう思いながらM249と一緒に飯を食つて一緒に寝た。何とかなつてない。

そういえば飯は少し変な味がしたな。やはりそう状態のいいものは見つからなかつたのかもしねえ。

N月、日

体の調子が悪いぞ。とてもよろしくない。

それほど深刻な症状という訳ではないが、体がだるい。せっかく足の傷が治りつつあつたのに、これではまだまだ外に出られないぞ。

M249は呆れた顔をして、それでも食料を探しにまた街に出て行つてくれた。何も

しないことを至上主義にしている奴にこれほど甲斐甲斐しく世話を焼かせる俺のなんと情けない事か。

養生しよう。そして復活した暁には恩に報いよう。一体何をしてやれるだろうか。本人に聞くのが一番かもしれないが、それは最終手段にしよう。古い伝手でも辿つて安全て快適な仕事と住居を紹介してやるのが現実的かもしれない。少し考えておこう。

### 追跡ログ02 〔筆記者H.K.416〕

これは彼の追跡・捜索において、なんらかの進展があつたときに書き残す追跡ログ……らしい。当番制にするらしく、二番手は私になつた。

とりあえず目新しい進展といえば、やはり彼が一時的に身を潜めていたと思われる家屋を発見したことね。彼の愛用していたあの粗末な布団の切れ端を発見できたわ。それと同時に、ひとつ絶対に見逃せない疑惑も浮上した。

彼が、誰か人形を一体側に置いている可能性がある。

決定的証拠を目撃したG.1.1は、その人形が彼の抱き枕としての立ち位置にいる可能性を危惧して取り乱していた。やがてストレスが最高潮に達したのか昔の性格が出てきてしまった。

最初こそ放つておけばそのうち元に戻るだろうと静観していたけれど『ごしゅじんさ

まはわたしたちに飽きたんですか』だの『もういらない子なのですか』だの、縁起でも  
ないうわごとを繰り返し始めたので黙らせた。

よりもよつて最後に『どんなことでもいたします、せいいつぱいごほうしします、だ  
からすてないでください、おねがいします、おねがいします、すてないで……』などと  
言い残したせいで気分は最悪。

指揮官に飽きられて捨てられるなんて、想像すらしたくないわ。

# 十三冊目

八月 二日

何をするにも気力が湧かなくて参つてゐる。日記だけは習慣で続いてゐるが、一度途切れたらもう続けられないかも知れしない。

近頃は閉じこもりすぎて時間間隔がおかしくなりそうだったので、軽く外に出て見ようと思つたのだが冷蔵庫の底に繋がるハツチが開かなかつた。

ここを知つてゐるのはM249だけなので、彼女が帰つてきてくれないと出れない……わけではない。実はこんなこともあろうかとバールのようなものを用意してあるのだ。強引にこじ開けるとハツチがダメになるので最終手段だが、どうしても腹が減つた。我慢にも限界がある。というか生命維持的に限界。明日になつても帰つてこないようなら自分の足で外に出て食料を探す。

八月・日

寝て起きたら知らない天井。混乱しつつも辺りを見回してみたらすぐにG & Kのリーフを発見してしまつた。早いよ情報の提供が。

【悲報】——俺、再びグリフィンに捕らわれる。

昨日は秘密基地から出たあと空腹に苛まれながらふらふら散策していたのだが、うつかり気絶してしまったようだ。そしてそのままお持ち帰りと。

まあ保護されておいて何を偉そうにという話でもある。今回は運よく助かつたが、そのまま野垂れ死ぬのが普通だ。あるいは鉄血人形に見つかって人質か拷問か。

自分で組織を抜け出しておいて組織に命を救われていては世話がない。

明日クルーガーと面会することになっているが、一体どの面下げていけというのか。とりあえず仕事の過密スケジュールの文句だけは言おうと心に決めた。

：月？日

予想外なことに、クルーガーは謝罪から話を始めた。

俺の脱走からしばらくして、カリーナを筆頭とした職員数名が過労で倒れたらしく、調査して始めて知った現場の凄惨っぷりにたまげたらしい。それと、俺を襲撃してきた404小隊についても。本来はもつと穩便に事を進めるはずが、手違いがあつて殺意のようなもの100%になつてしまつたらしい。なにそれこわい。でも生きてるからノーカン。

あと、俺を運んできたのは他でもないM249であつたそうだ。俺を担いで近くにい

たグリフィンの小隊に救助を要求したらしい。うーん、感謝。

でも無事だつたならなんで戻つてこなかつたのだろう。機会があるなら問いただしうけたいところだ。

そして俺の処遇だが、やはり前と同じようにとはいかないうらしい。というかクルーガーは前の職場を安全かつ確実に前線に貢献できる、エリートのための職場だと思つていたらしい。実態は毎日がデスマーチでしたけどね。

ともあれやんちゃをしてかした俺をしれつと元のさやに収めるわけにはいかないわけ。

普段は地味な仕事をこなしつつ、たまーに大きな仕事として昔みみたいに雇われの人形を率いて前線を闊歩することになつた。安全とは程遠い業務となつてしまつたわけだが、まあ結局こういうのが性に合つているのだろうな。

そういえば、グリフィンが雇つた人形ってなんだ。グリフィンそのものが傭兵組織じやないか。そう思つて質問してみると資料を渡された。

404小隊のプロファイルだつた。

AR小隊のプロファイルも渡された。  
とりあえず飯がうまい。

：月？日

とはいいつつ毎日出撃というわけでもないので、普段は用務員のおじさんAとしてグリフィンにちやつかりと馴染ませてもらうことになつた。食堂の会計からトイレ掃除まで色々だな。あれ、やること多くね。こつちだけでよくね？ダメかな？

住居は寮を新しく借りることになつた。新設してまだ住人がいないやつ。記念すべき最初の入居者に俺が選ばれた。あと隣の部屋にM 2 4 9。隣の部屋に居るはずなのにその日の晩には俺の部屋で寝ていた。お前というやつは。聞きたいことがあつたはずだけど寝て起きたら忘れた。まあきっとそんな重要なことじやないさ。

それと、404小隊と再会した。いやこの書き方では少し語弊があるか。確かに再会ではあつた。昨日、建物の外から窓を拭いていたら、中にいるUMP45と目が合つたんだ。404小隊もその場に全員いた。俺はその窓の掃除を途中で切り上げすぐに別の場所に移動した。

ところで明日、この寮に入居する人形が4人いるらしい。

俺は引っ越し手続きを始めた。

# 十四冊目

10月\*日

引つ越しの申請をしようと朝早くに起きた。しかし寝る前に書いたはずの書類がどこにも見当たらないというトラブルが発生。当然のように同室で惰眠を貪っていたM 249を起こして聞いてみるも知らないと一蹴して一度寝しやがつた。おかしいなあ、机の上に置きっぱなしになってしまったからなるはずなのに。

まあないものは仕方がないので大人しく出勤。今日もまた窓拭きだ。

先日の反省を生かし、事前に室内を確認してから作業を始めたことにした。45の時のような恐ろしい体験はもうしたくないからな。脳裏に浮かべるだけで息が詰まる。あまり思い出したくないので日記にも詳細は記さないことにした。  
キーワードは満開と笑顔とラフレシア。

10月%日

また書類がどこかに消えた。俺は幻覚でもみているのだろうか。何か謎の力で俺の

引っ越しが阻止されている気がしてきた。まあ、正直こここの居心地はかなりいい。もう少しここに住んでいてもいいか。引っ越しはまた今度で。

そういえば遂に404小隊が入居してしまった。とりあえず鍵はできるだけ良い奴を用意してある。たぶん大丈夫。

そう思つて仕事から帰宅するとクローゼットからナインがでてきたので、冷静に奥に押し戻して取っ手にかんぬきを刺し内側から開かないようにした。つい先ほどのことだ。

今もベットの横でM249とG11が殴り合い宇宙をしているが知らん。後回しだ。  
今日はもう寝る。

#### 10月〆日

起きたら俺とM249と404小隊で知恵の輪みたいになつていた。骨が折れなかつたのが奇跡。なお仕事には遅刻した模様。他の連中が起きる前に脱出できたのは不幸中の幸いだつたな。もつと大惨事になるところだつた。

今日は食堂で会計のおっちゃんをした。SPP-1とウエルロツドが挨拶に来てくれたのが嬉しかつた。二人は俺が泥臭い戦場ではなく、上品な屋敷に無断で遊びに行つて大事そうなディスクをちよろまかしたりしていた頃の馴染みだな。

特にウエルロツドとは再会の挨拶そこそこに昼飯の注文の中に暗号を混ぜながらの会話になつた。正直他愛もない会話なんだから普通に話せばいいじやんと思つた。あれ頭も神経も使うから嫌い。

ちなみに内容は専属の逃がし屋としての熱烈なスカウトが9割だつた。逃がし屋稼業はとつくに引退したつもりなので丁重かつ迂遠な言い回しでしかしハツキリとお断りした。あの喧しい人形が来なかつたらずつと居座つていたと思う。たぶん毎日通り詰めてくるんだろうなあ。



「お湯の水割りください」

カウンターの向こうで、金髪の少女が無表情のまま言い放つた。

「……各テーブルに備え付けのピッチャーをご利用ください」

「冗談です。ここを利用するのは初めてでして。緊張のあまりつい

へたくそな嘘だつた。そんな不動の姿勢でキリつと立ちながら何を言い出すんだ。だいたい開口一番の冗談にしてはタチが悪すぎる。相手が命乞いをしていても躊躇いなく引き金を引くのが似合いそうな冷徹な表情でしていい発言ではない。いくら俺と

相手——ウエルロツドが初対面ではないとしてももつと加減を覚えてほしい。

だが、応対する俺もまた冷静だつた。こう見えて俺は職務に忠実なことに定評があるんだ。だから今日もこうして似合わない敬語を真面目に使つてる。

「落ち着いて。注文は？」

「今日はパンの気分です。あなたをオススメです」

フルスロットルだつた。どこをどうみても見ても分からぬが、ウエルロツドは確実に気分が高揚していた。言葉の中に別の意味を持たせる会話をしているはずが、ダイレクトな直球デッドボール炸裂させてきたぞこいつ。

「消費期限ぎれですね。またの機会に」

だが、俺はこれを難なくいなす。こういう手合いには慣れている。特に話の通じない相手。大丈夫、悲しくない。

「あまり揮発性が高すぎるのも考え方ですね。流行りのテラスに不在通知ありますよ」「泡立ちの良さが売りでもありますから。廉価版で勘弁してください」

猛烈なアプローチをさらりと流されたことに立腹したのか、ウエルロツドは眉をひそめて非難の声を上げた。だが俺はめげずのらりくらりと流す。

「水かきの足りないこのご時勢ですよ。水平線を照らす水先案内人が必要なのです」

「箱舟ならもう座礁して長いでしよう。さ、きなこパンです。本日のおすすめですよ」

話を締めに掛かる。店員と客という関係を活かす。長話はできないからな。

「む、話はまだ——」

「たい焼きを所望するにやああああ！」

後ろから別の客が突入してきた。素晴らしいタイミングだ。その強引さもグッド。「はい、たい焼きですね。では後にお客様がつかえていますのでこの辺りで」

「……ええ」

いかにも不満そうな声を上げ、ウエルロッドはカウンターから離れて手ごろな席に向かっていった。いやあウエルロッドは強敵でしたね。

なおウエルロッドは営業時間が終わつて俺がシャツジャーを閉めるまでパンをほおばりながらずつとこつちを見ていた。

目を合わせないよう気を付けないとな。

# 十五冊目

H日＼日

ヒヤア、新鮮な休日だあ！ 今まで毎日が休日みたいな状況だつたが、休日というものは働いてこそ輝くのだ。そして素晴らしいことに今日は何の予定も入つていない。そして素晴らしいニュースがもう一つ。404小隊が出撃です。そして今回は俺にお呼びがかからなかつた。M249も今後の扱いがどうとかで呼び出されたので今日は俺一人。すなわち我自由なり。絶好の機会なので室内のセキュリュティチェックをした。まずはクローゼットの調査。試しに奥を覗いてみるとあら不思議、壁をぶち抜いて隣の部屋とつながつているではありませんか。いやこれはダメですわ。クローゼットを封印するしか手がない。俺はそつと諦めた。せつかくなので鎖や南京錠でがんじがらめにしてデコレーションした。外観がヤバい。仕方がないのでそういうインテリアとして扱うこととした。名実ともに封印の様相を呈している。

そんな下らないことをしながら午前中を過ごしていると、お客様がやつてきた。どうか、いた。ベットの下からM4A1が出てきた。

お前いつからそこにいた。詳しく聞き出すと404小隊の出発と入れ違いで来たら

しい。嘘つけ。

詳しく述べると引つ越しの挨拶に来たという。ならまでは玄関から来い。でも引つ越し蕎麦をくれたので多めに見ることとした。許す。でもベッドの下から取り出すのはいかがなものか。その後、一緒に昼飯として蕎麦を食べたらしづしづと帰つていつた。律儀なようでフリーダムなやつだ。

とりあえずベッド下にこれ以上は入れないように使つてない毛布を敷き詰めた。我ながら完璧なセキュリティだ……。

H日(?)日

俺の部屋を中心として、周囲の部屋を404小隊とAR小隊に取り囲まれてしまつた。どうして。珍しく俺とM249しかいないベッドで清々しい朝を迎えたなどと思つていたら、朝出かけるときに部屋の前でにらみ合つていた。お互に無言で向かい合つて立ち尽くすのはやめてほしい（震え）その間のドアから出てくるぼくはどうなるんですか。

お仕事はいつも通り。せつせと食堂で職務を果たしたり、居座ろうとするウエルロッドをIDWが押し流したりなどした。食事中ずっと俺の方を恨めしい視線で見つめてくるのもいつも通り。

それと、建屋内の廊下を掃除していると数日ぶりにSPP-1と再会した。時間があつたのでまあまあ込み入った話をしたが、SPP-1も結構上手いことやっているらしい。まあ能力はある奴だつたから、それもそうか。

あーだーこーだ言いながらも俺とウエルロッドのドキツ☆命知らずの戦慄地獄行脚を何度も生還しているわけだし、不幸な巻き込まれ体质ではあつても世渡り上手なのかかもしれない。最近通勤に不便を感じているらしいので、グリフィンに新築の寮があることを教えておいた。結構好意的に検討してくれていたので、手応えありだな。

お前も不幸になれ。

H日；日

SPP-1という巻き込み役を手に入れたことで、間接的に俺のストレスを軽減してくれるのではと期待している。早く越してきてくれ。昨日のにらみ合いの後にどういやりとりがA R小隊と404小隊で交わされたかは知らないが、結果的に俺と404小隊とM249、更にM4が加わることでデスクトップPCの後ろでごちやごちやに絡まつた配線みたいな姿で目が覚めた。今までで一番脱出に時間がかかつたぞ。というか人数に対して明らかにベッドの広さが足りない。山盛りで積むような状態なんだよなあ。でもそのために買い替えるのは嫌すぎる。いつそ片づけて床で雑魚寝するか？

いやどうせ朝ぐちやぐちやになるのは変わらないよな。朝ぐちやぐちやにならない生活を送りたい今日この頃。

だが、今日は良い出会いがあつたので大丈夫。雲一つない晴天だつたので気分も良かつた。

というのも、実は前々から敷地内の庭園で園芸おじさんをしているとずつとこちらの様子をうかがつている人形がいたのだが、その人形に今日ついに直接声を掛けられた。聞いてみると俺から懐かしい香りを感じていてずっと気になつていたらしい。

せつかくなのでそのまま水やりをしつつ話を聞いてみると、なんと我が祖国の出身であるという。よく見れば衣服や桜のモチーフなどそれらしい意匠がちらほらと目に入るではないか。なんというかもうそれだけでこみあげるものがあるよね。

当人は一〇〇式と名乗つていたが、俺は郷愁の念を込めて祖国ちゃんと呼ぶことにした。彼女に俺の素性を簡単に説明すると、それはもう感極まつた様子だつた。彼女にとつて、日本とは名を知るばかりの遠い故郷。俺という存在は彼女にとつて憧憬そのものであると、そんな感じのことを長時間に渡つて熱弁された。俺はその熱意に引いた。めつちやがつづいてくるので怖かつた。

この庭園にはよく来るそうなので、また縁があるだろう。  
次はもつと落ち着いているといいな、祖国ちゃん



# 十六冊目

T月〆日

朝を迎えるもベッドの上が狭くない。というか寝起きが苦しくない。これは素晴らしいことだ。それも404小隊とAR小隊が玄関先で無言のにらみ合いをしていくお詫びである。

なので朝起きたときにいるのはM249だけというわけだ。その影響かG11のM249を見る目がヤバい。頼むから穩便に事を済ませてくれよ。というか何事もない方向で頼む。

寮からグリフィンに向かうとすると、通り道で明らかに待ち構えている祖国ちゃんの姿が目にに入った。不穏な空気を感じたので彼女には悪いが遠回りした。

さて今日は食堂担当。ウエルロッドはいつも通りIDW他数名が流してくれるので一番安全な日なのかもしれない。ただ、RO635が仕事帰りの時間になるとどこからともなくやってきたと思えば、『私とあなたが結ばれるべき635の理由』と題された分厚いレポートを取り出し始めたのたので、俺は努めて冷静に受け取りをお断りした。

R O 6 3 5 はハツとしたような表情をしたあと、手書きで作り直してきますと言い残すとピユーッと去つていった。そういうことじやないんだよなあ。

T月「日

なんということでしよう。404小隊が出撃してしまわれた。ので、AR小隊が突入してきてしまつた。一番乗りはやはりというべきかSOPMOD2だつた。俺を視認するや否や加速して突貫してきたからな。お前は昔から加減という言葉を知らないやつだつた。昔から頭ぐりぐりこすりつけてマーキング的なことをするのもよしなさい。それとAR15、お前絶対俺の枕盗んだだろ。ちらちらと視線奪われてたの俺知つているからな、拳動不審すぎてわかりやすいんじや。

あとM16は部屋の隅々まで調査して俺が工口本を隠し持つていなか気にしていたな。俺の性癖でも究明する気なのかもしれないが、生憎どこにもヒントは残してないぞ。だつて万が一どつからか情報がもれたら、十中八九どえらいことになる予感があるから。

あと問題児のM4な。予想外なことに突撃みたいな真似はせず、AR小隊の中でも消極的だつた。玄関より先に入らずに立つていただけだからな、慎ましい。大変よろしい。

ただうつすらと笑みを湛えながら、瞬きもせずにやたらと熱っぽい視線でこちらを見

つめていたのがこう、不安を煽る。でも無害だからいいや。ところでM249はどこいった?

ちなみにR0635はいなかつた。どうやら何かを書き込むのに夢中で呼んでも気づかなかつたそうだ。俺は何も知らない。心当たりなんて一切ないです。

T月π日

404小隊が帰還しました。わあい。AR小隊が出撃になりました。そんなあ。404小隊がなだれ込んでくるんじやあ。懐かしきUMPコンプレス。できれば二度と体験したくなつた。知恵の輪系列とはまた違つた苦しみがある。というか明らかに前より引き締まりがよくなつてゐる。何か心境の変化があつたのだろうか。そういうアップグレードは求めていません。

ただありがたいことに416がいてくれるので、俺が三途の河を渡り切る前にUMP姉妹をアンロックしてくれる。俺の命は守られた。ただその流れで朝メシを作つたり着替え持つて来たり甲斐甲斐しく世話をし始めるので困る。特に今日は拒む素振りを見せるとわなわなと震え出して穏やかではない雰囲気になつたので、大人しくされるがままにしておいた。416の機嫌はよさそうだつたが、なんだかなあ。

T月々日

AR小隊と404小隊が両方ともいるので、今日はM249と健やかな朝を迎えられ

た。尊い朝だ。

グリフィンに向かう道すがら、出待ちに祖国ちゃんともう一人R0635が追加されていた。はいもちろん別の道を通りましたとも。遠回りになるけど絶対こつちの方がマシ。やつらに捕まつたら確実半日ぐらい祖国トークをさせられた挙句、更にR0635のクツソ分厚い手書きレポートをプレゼンさせられてもう半日潰れるパターン。万が一にも捕まるわけにはいかない。

いつも通りの仕事をしつつ、合間の昼休みでこれまた懐かしい昔馴染みと顔を合わせた。

名をA E K—999といい、これがまた付きやすい気のいいやつである。いわゆる悪友のようなものだ。互いに近況を話したりと団欒のひとときをすごさせてもらつた。こいつとはまた一度なにか悪さをしたいものだ。ところでしきりに俺の交友関係を気にしていたが、何か気がかりなことがあつたのかもしれない。積もる話もあるので、次の休日に一緒の買い物に行くことになつた。いわゆるデート的なやつだろう。相手はそうは思っていないだろうけどな。

## 閑話

「聞いてくれM4！ 今日はなんと22秒も指揮官と話せたんだ！」

「やりましたね姉さん！ 最高記録更新じゃやないですか!!」

グリフィンの基地の庭園、ピロティと呼ばれる軒下の空間で二人の戦術人形が話しかけていた。

上気した表情で嬉々とした表情で語っている方がM16、それを自分の事のように喜んでいるのがM4である。

「いやあ至福の時間だった。一瞬のようにも、永遠のようにも感じられる18・37秒だった」

「ずいぶん正確ですね！」

「録音したからな！ 前回の会話から実に16時間28分48秒ぶりの会話だ！」

「ちなみにどんなお話をされたんですか？」

「え、M4の話とか……。あと、M4の話と……あつ、M4のこととかも話したぞ！」

「うーんまるで成長してないですね！」

「うつ……」

「……ち、ちなみに指揮官はそれを聞いてどんなことを仰つていきましたか？」

M16が無言で録音デバイスを再生する。淀みない手つきだった。

『そうだなあ、M4は健気で良い子だか「う、っ！」』

録音された音声を認識したのと同時に胸を抑えてえづくM4。そして険しい顔のまま一言。

「ま” つうえつ……。ま、待つて……無理……しんどい……」

「え、M4？」

「ね、姉さん……そういう事前に心構えが必要な刺激物は予め相手の合意を確認してからでお願い……」

それからしばらく大丈夫、大丈夫としばらくぶつぶつ呟いたあと、元の調子を取り戻した。

「なら話を戻すが……浮かれてばかりもいられない状況になつたんだ」

「え？ これ以上状況が悪化するようなことがありえるんですか？」

「お？ さては私たちの中で既に見解の相違が起きているな？」

「今はようやく最底辺から数ミリ浮上できたらいいですね」

「うーん我が妹ながら辛辣」

どうやらM16と違つてM4は現実をよく見えているらしい。戦闘では、いや戦闘以

外でも自慢の姉なのだが、いまこの瞬間はあまりにも頼りない。ことあの指揮官が関わってしまうともう本当にどうしようもない。特に直接顔を合わしてしまうとこうだ。

そうして呆れつつも、話の続きを促す。

「そんなことよりなにがあつたんですか」

「ああ、うん。AK-47つているだろ?」

「ああ、あの豪気な」

AK-47といえば、いかにも歴戦の傭兵のような風体のワイルドな戦術人形だ。その外見に相応しい戦闘のスペシャリストである。グリフィン内においても確かな地位を築いており、銃そのものの知名度も相まって彼女を知る人は多い。

「それが、そのAK-47が近頃指揮官に対してもよそよそしくてな。これは、非常に由々しき事態だといえる」

「え、それのどこがいけないんですか? むしろ距離を置いているというのであれば一種のチャンスなのでは」

「今まででは任務から帰投したら指揮官の肩に腕を回して軽口を言い合っていたのだが」

あの指揮官は意外とグリフィンの人形たちとの距離が近い。このグリフィンに用務員として転属してまだ日が浅いが、出撃から帰投した人形をねぎらいがてらよく世間話をしている。時期的にはもう彼との会話を楽しみにしている者がいてもおかしくない

時期だつた。

「ああ、しようちゅうやつてますよね」

「それが、なんと最近は話すにも遠い距離からひらひらと手を振るに留めている」

「へえ」

なるほど、確かに一気に距離が離れている。確かにそんな日もあるだろう。

「しかも指揮官に会う前に髪を梳いたり身だしなみを整えたりなどしていた！」

「はあ」

AK—47といえば、あの長い金髪も印象的だ。特に手入れしていないようであちこ

ちの跳ねつ毛が目立つていたが、何か要因があつて最近は気にしているらしい。

「あまつさえいつもより服装の露出を抑えるようになつた！　もうわかつただろう、AK—47は誰がどう見ても指揮官を意識している——!!」

「ほお」

AK—47の服装は、深緑の切れ布で雑に作られたビキニとホットパンツのみで、かなり露出の高い部類に入る。本人がいかに他人の視線に頓着の無いかよくわかる格好ではあるが、それを改めるということは、やはりそういうことだろうか。

「すなわち、今や私は予断を許さない状況に置かれているということだ。彼女は図らず

しも『恋愛四十八手裏奥義最終項「一押してダメなら引いてみな』を実現している!!』

「まあ」

初めて聞いた、何だそれは——などと幼稚な質問をM4はするつもりはない。暴走した姉のあしらい方などはとっくに心得ている。迂闊に藪をつつくべきではない。ただでさえ何かよくわからないものが飛び出している現状でおなかいっぱいなのに、それの全貌など知りたくはない。

「指揮官は突然AK—47と精神的・身体的ともに距離が離れたことにより、自然とAK—47を目で追ってしまうのだ。そして目にするのはいつもより女性らしくなったAK—47……!」 そして指揮官はこう思うのだ。

『あれ、AK—47ってあんなに色っぽかつたつけ……?』と! こうして指揮官もまたAK—47を意識し始める!』

「むう」

意外にもそれらしいことを言い始めたので、M4は思わず聞き入ってしまった。確かに一理あるかもしれない。あの自由人がそれほど相手を意識しているとは思えないが。「互いが互いを意識し始め、いつもと違う距離感に戸惑いつつも心の距離は静かに近づき、やがて二人は二人は……なら――――――ん!!!』

「わあ」

いよいよ佳境に入つた妄想の結末が気にくわなかつたのか、目を見開いてM16が現実に戻つてくる。暴走した姉はだいたいこんな感じだ。  
「認めん、そんなことは断じて認めんぞ私はああー！！」

「あ、いつちゃつた……」

雄たけびを上げながら駆けだすM16と、それを見送るM4。つかの間の、平和な日常の一幕であつた。

# 十七冊目

## ▲月●日

A E Kと出掛ける日。待ち合わせの時間になつてもA E Kは現れなかつた。約束の時間から20分は過ぎていた。A E Kはそれほど時間にルーズなヤツではない。ひよつとして何か彼女の身に起きたんじやないだろうか。変化が起きたのはそういう心配が浮かび始めたころだ。それは唐突だつた。

「ごつめーん指揮官、待たせ「ウワアーッ! マンホールからナンデ!?」

当時の俺は心底驚いた。足元のマンホールからA E Kがひよつこりと顔を出してきたのだ。お前はいつからそんな非常識な奴になつてしまつたんだ。もう一度いうが俺は心底驚いた。誰でも驚く。

A E Kも申し訳なさそうにしていたが、それは自分のダイナミックに余りある登場方法というよりも遅刻に対する比重が多いようだつた。ひよつとしてこの子は常識が僅かにズれているのでは。いやよそう勝手な予想は彼女に悪い。

さて、どうしてこんな意味不明な行動をした事情を聞いてみると、なにやら諸々の野

暮用によつてこのルートでしか待ち合わせ場所にアクセスできなかつたと、そういうことらしい。

……諸々の野暮用とは、待ち合わせ場所に向かうのに地下水道を辿らなくてはいけない事は。うーんミステリー。

だが、触らぬ神にたたりなしという言葉もある。俺は深く追求することをしなかつた。これ以上新しい爆弾が飛び出て来ても俺は処理できないからな。

そのあとは匂いは問題ないというA E Kの謎主張を聞き流しつつ、ゲーセンで軽く時間潰した。どうしてオフの日まで銃を撃たなきやならんのかという話だが、弾薬を気にしなくていいのが心地よいそうだ。マシンガン特有の悩みというやつらしい。

とまあ、そんな感じだつた。買い物でも特に何もなかつたし、事件性があつたのは最初の集合のときだけだつたな。そう頻繁に事件が起きてたまるかという話でもある。

そのまま終われば良かつたんだが、A E Kは最後に見せたいものがあると言い出したので俺は誘われるままA E Kの住居に足を踏み入れてしまつた。やめとけばいいのにな。

そこで見たものはつまり、俺の部屋だつた。

A E Kの家に俺の部屋が用意されていた——などというチャチな話ではない。見知った間取に見知った家具。いくつか型が違つたり、小物がやや安いものに置き換

えられてはいるが、それでも一目でわかつた。

あれは”俺の部屋”だ。真つ当にグリフィンに勤めていた数年のあいだ、過ごしていった場所。

だが、その場所は俺が脱走したとき、纏めて失踪したということで処分されたはずの場所もある。その一室が、A E Kの家の中に再現されていた。だが、俺は一度もA E Kを家に呼んだ覚えはない。

A E Kはとても嬉し気にその部屋を紹介していたが、俺はもう全身の血の気が引いてしまって曖昧な笑みを返すことしかできなかつた。とりあえずその日はそのままそそくさと帰つた。

俺は無事だ。

### ▲月〇日

今日は仕事中にいろんな客が現れた。客と言つてもほとんど見知った顔なんだがな。404とかA Rとか。しかも意味深な言葉を好き放題言い残していくので意味不明。ただ何となくだがよろしくない感覚だけが残つて気持ち悪い。

「しきかあくん昨日はだあれと出掛けていたのかな、かな？」

いつものように仕事をしている最中、廊下でばつたりと出会つたU M P 45の第一声

がこれである。突然物陰からぬるつと現れたので驚いた。目元には影が差し、ただその瞳だけが深海に浮かぶチョウチンアンコウの灯りの如き仄暗い光を発していた。どういう仕組みなんだそれ。探照灯？ 機嫌が悪そうではあるのだが、言動はいつも通りなのが不気味でもある。

そして俺の経験が言つてゐる。これは良くない兆候であると。背筋につららを差し込まれたような感覚だ。自然と背筋が伸びてしまふのも仕方がないと思う。

「じゃあ女と行つたんだね！」と、45は至極楽しそうな、抑揚のついた声でそう言つた。俺はおなかの調子が悪くなり始めていた。

俺は必死にグリフィン自体の女性の割合の方が高いがゆえにそういうた一面が否定しきれない部分を認めざるを得ない可能性について説明をしたが、「で、楽しかつたの？」とばつさり断ち切られた。その後もしばらくそのような問答を続け、最終的には「そつかそつかそれは良かつたね！」と大変満足そうな笑顔を浮かべて去つていった。こわい。もう45とは顔を合わせたくない。

そのあとも”家族の定義”について俺の考えを聞き出してくる9と他2名や、やたらの身の心配をしてくるAR小隊などとも遭遇した。

大丈夫だ。俺はまだ何ともないぞ。

# 十九冊目

二月四日

先日のお出かけ以来、A E Kがしきりに俺に構いに来るようになつた。その表情はこ  
う、きらきらと輝いて見えるしわくわくしたオーラをひしひしと感じる。その姿には  
何も不穏な印象はないのだが、どうしてもA E Kの部屋の俺の部屋が脳裏をよぎる。こ  
んなに良い子なのに負のオーラを幻視してしまるのは何故なのか。無垢ゆえの邪悪的  
な。聞けば週末はリサイクルショッピング巡りが趣味だという。彼女としては例のあの部  
屋の完成度はまだ満足のいくものではないそうで、一層の再現に励んでいるそうだ。正  
直俺はもう見分けが付かないと思う。

朝目覚めてあの部屋にいたら、そのまま安心して二度寝するんじやないかな俺。どう  
しよう、そういえばA E Kが何の目的である部屋を作つているのか知らない。どうしよ  
う、きっと聞いてみたら嬉々として語ってくれるんだろうけど、俺はそれをどんな顔を  
して受け止めればいいのかわからない。うん、聞くのはよそう。

二月五日

最近ずっと意識的に遠ざけていたR O 6 3 5と祖国ちゃんに罪悪感が芽生えてきたので、今日は時間を作つて会いに行つてみた。流石に朝から遭遇してしまふと遅刻確定だからな。

まあ案の定というか、手書きでレポートを俺に手渡してきた。しかも前回と内容が違う。今回のテーマは『誓約のメリットと相手の選び方～オツドアイのSMG以外ありえない～』だ。六法全書よりあつてい。しかも手書きなのに本として装丁されている。革のハードカバーだ。気合が入りすぎているのではないだろうか。これなんて魔導書？と思わず聞いてしまつた俺は悪くない。

さて、まだ終わりではない。次は祖国ちゃんだ。

と仰々しく書いたものの、実際そんな圧迫感のある会話ではなく団欒した時間ではあつた。いつまで経つても終わらないという点に目をつむればな。

俺がそれとな一く話を切り上げたそうな雰囲気を出しても、それに気づきつつも絶対に話を終わらせまいという立ち回りをしてくるのでつらい。俺が強引に話を終えようとしたあたりから段々と息を荒げ、目もギラつきはじめてくる。そうなると俺と祖国ちゃんの間にちよつとした駆け引きのようなものが生まれてくるので、俺の帰りたい気分がピークに達する。

総評：やめときやよかつた。

## ・月の日

前々から思っていたんだが、AR小隊の挙動が不気味。特にM16を筆頭して一連のアクションが謎なので困惑を隠せない。一番最近の例としては、現れたと同時に好きな天気の話題を振るだけ振つて颯爽と去つていたM16。会話が成立する前にどこかに行つてしまふので俺としてもどうしようもない。なんなんだいったい。

あとはM4の姿も近頃よく見る。ただ、会話とかはあまりなくて、20~30mくらい距離を離した状態からこつちをじつと見ている。こいつが一番不気味なんだよなあ……。突然部屋に押し掛けてきたと思つたらM249の使つていてる枕（俺のもの）を強奪して抱きかかえたりとアクションが図々しいわりに距離感の取り方が独特で得体の知れなさがある。何をしだすかわからなるのは本当に勘弁。

逆にSOPMOD2は一貫している。俺を視認したら猪突猛進で突撃してくるだけだからな。精神的な負荷がほんどのないのは素晴らしい。ただ受け止めるたびに結構腰に来るのだけがいただけない。腰の調子が悪い日なんかは遮蔽物を利用するなどしてやりすごしている。でないと腰にとどめを刺される。

RO635は割愛するにしても、他の三人に言及した以上AR15にも触れておきたいところだが、最近はとんとその姿を見かけない。どこで何しているん

この日記を書いている最中、天井からAR15が落ちてきた。突然背後から物音がしたので振り向いてみると、頭からどしゃつと落下して痛みでうずくまつてあるところだつた。

天井で何をしていたのかと聞いてみると、「不審者がいないか確認していた」だそうだ。残念ながらこの場で不審者の名が最もふさわしいのはお前だAR15よ。本人にそう伝えたところ、頭の上に？マークを浮かべて首をかしげていた。この娘は自覚がないのがやべえ。